

NOBEOKA-JYONAI

# 延岡城内遺跡Ⅲ

上下水道課新庁舎建設にかかる  
延岡城内遺跡(第13次)発掘調査報告書

2005.3  
延岡市教育委員会

NOBEOKA-JYONAI

## 延岡城内遺跡Ⅲ

上下水道課新庁舎建設にかかる  
延岡城内遺跡(第13次)発掘調査報告書



2005.3  
延岡市教育委員会

## 序 文

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、東は砂浜海岸やアス式海岸が日向灘に面し、西は高千穂の山々から早日の峰、行勝山を望み、市の中部から北部では、五ヶ瀬川・大瀬川・祝子川・北川といった一級河川が流れる自然豊かなところです。また一方では、これらの豊かな自然を利用した水力発電によって、県内最大の工業都市としても知られています。

延岡城跡は、延岡市の中心市街地となっている川中地区に位置し、北を流れる五ヶ瀬川南を流れる大瀬川に挟まれた、天然の独立丘陵を選地し築かれています。城の起源は、これまでの発掘調査等によって、室町時代頃から中世城郭としての利用が行われていたことが判っていますが、本格的には日向国最大の近世城郭として慶長8（1603）年、初代延岡（県）藩主高橋元種によって築城されたものです。延岡城跡は、九州管内でも有数の高さ約22mにも達する壮大な「千人殺し」石垣をはじめとする石垣群や、天守台・本丸・二ノ丸・三ノ丸といった各曲輪が、良好な状態で残っています。

今回の発掘調査は、延岡市水道局と下水道課の組織統合が予定されることにより、移転先となる延岡市水道局内に新庁舎を建設することが計画されたため、これに先だって実施したものです。延岡市水道局周辺は、これまでの調査により武家屋敷に伴う井戸跡や石垣列、また、絵図に記載のない大溝等が所在していたことが明らかとなっています。

今回の発掘調査では、調査区の約1/2が近代の建物建設により破壊を受けていましたが、武家屋敷に伴う井戸跡や柱穴群が検出され、延岡城下における武家屋敷跡の様相の解明にさらに繋がるものと思われます。調査では、廃棄井戸跡を祀った土坑や、初出土となる銅錢が出土し、今後実施されるであろう延岡城下の調査において貴重な資料を提供してくれた遺跡となっています。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助になることを願うとともに、研究資料として活用いただければ幸いです。最後になりますが、発掘調査に際して、埋蔵文化財の保護にご理解と多大なるご協力を賜りました下水道課、延岡市水道局をはじめ、関係諸氏の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 牧野 哲久

## 例　　言

1. 本書は、延岡市上下水道部下水道課新庁舎建設にかかるものに先立って、延岡市教育委員会が実施した延岡城内遺跡（第13次）調査（延岡市本小路77-1）の発掘調査報告書である。
2. 本書にかかわる遺物および記録類の整理には、高浦一哲、敷石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子があたり、同教育委員会の尾方農一氏の協力を得た。
3. 本調査にかかわる遺構写真は高浦が、遺物の写真については高浦、尾方があたった。
4. 本書の執筆・編集には、高浦があたった。
5. 本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。また、文中で方位を述べるにあたっても、磁北を基準としている。
6. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

柱穴	→	P-1～	焼土坑	→	SC-1	祭祀土坑	→	SC-2
井戸遺構1	→	SF-1	井戸遺構2	→	SF-2			
7. 報告書掲載の遺物資料は、時間・経費等の制約から残存状態の良好な資料を中心に行った。したがって、掲載資料が本遺跡における遺構・遺物の性格・流通状況を示しているものではないことを予め断っておきたい。
8. 陶磁器の資料分析には、柳田晴子氏（宮崎県埋蔵文化財センター）からご教示をいただいた。
9. 本調査にかかわる空中写真は、（株）九州航空に委託した。
10. 本調査では、延岡市教育委員会社会教育課による「はらはら・わくわく探検隊」の一環として、2005年1月29日に市内の小学生45人が発掘体験を行った。
11. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、延岡市民俗資料館に収藏・保管し、以後、延岡市内藤記念館にて公開する予定である。

# 本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 延岡城と周辺調査	3
第3章 延岡城の歴史	
第1節 延岡城と藩主の変遷	6
第2節 延岡城関係年譜	9
第4章 調査の概要	
第1節 絵図史料からの検討	13
第2節 調査の方法と基本土層	13
第3節 調査の概要	14
第5章 調査の記録	
第1節 第1文化層（第7層上面）の検出遺構と遺物	17
第2節 第2文化層（第8層上面）の検出遺構と遺物	22
第3節 第3文化層（第9層上面）の検出遺構と遺物	27
第4節 第9層内の出土遺物	29
第6章 まとめ	
第1節 第1文化層（第7層上面）の検証	32
第2節 第2文化層（第8層上面）の検証	32
第3節 第3文化層（第9層上面）の検証	33
第4節 終わりに	33

# 挿図目次

Fig. 1 延岡市位置図	
Fig. 2 調査地位置図	2
Fig. 3 延岡城および周辺調査位置図	4
Fig. 4 調査区位置図	13
Fig. 5 グリッド配置図	14
Fig. 6 南壁土層断面図	15
Fig. 7 第1文化層遺構分布図	18
Fig. 8 第1文化層検出時出土遺物実測図1	19
Fig. 9 第1文化層検出時出土遺物実測図2	20
Fig. 10 第1文化層検出時出土遺物実測図3	21
Fig. 11 焼土坑実測図	22

Fig.12	第2文化層遺構分布図	23
Fig.13	祭祀土坑・井戸跡1・2・実測図	24
Fig.14	第2文化層検出時出土遺物実測図	26
Fig.15	第3文化層遺構分布図	28
Fig.16	第3文化層検出時出土遺物実測図	29
Fig.17	9層内出土遺物実測図	29

## 表 目 次

第1表	延岡城および周辺調査地一覧表	5
第2表	延岡城関係年譜1	9
第3表	延岡城関係年譜2	10
第4表	延岡城関係年譜3	11
第5表	延岡城関係年譜4	12
表6表	出土遺物観察表1（土器、銅錢、石・鉄製品）	30
表7表	出土遺物観察表2（陶磁器、瓦類）	31
表8表	報告書抄録	40

## 写真図版目次

PL.1	有馬家中延岡城下屋敷付絵図	8
PL.2	南壁土層断面	16
PL.3	第1文化層遺構検出状況	17
PL.4	不明高壇部検出状況	17
PL.5	第2文化層遺構検出状況	22
PL.6	焼土坑完掘状況	22
PL.7	井戸跡1崩落壁面検出状況	25
PL.8	第3文化層遺構検出状況	27
PL.9	調査区全景1（西より）	34
PL.10	調査区全景2（垂直）	34
PL.11	井戸跡1・2全景1（垂直）	35
PL.12	井戸跡1・2全景2（東より）	35
PL.13	祭祀土坑洪武通寶出土状況	35
PL.14	調査風景1	35
PL.15	調査風景2	35
PL.16	出土遺物1（陶磁器）	36
PL.17	出土遺物2（陶磁器）	37
PL.18	出土遺物3（上師器）	38
PL.19	出土遺物4（瓦質土器）	38
PL.20	出土遺物5（瓦類）	39
PL.21	出土遺物6（銅錢）	39
PL.22	出土遺物7（土・石・鉄製品）	39
PL.23	熙寧元寶・方篆治平・洪武通寶	39
PL.24	犬形土製品	39

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

延岡市上下水道部では、平成19年4月1日をもって延岡市水道局と下水道課の組織統合が予定されていた。このことから移転先となる、延岡市水道局内に新庁舎を建設する計画がなされた。新庁舎は、職員30数名の事務スペースの確保が必要となることから、水道局庁舎北側の現駐車場内に中二階建てで増築する案がなされた。

建設予定地は、延岡城内遺跡に位置し周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱われていることから、市教育委員会において事前の確認調査を実施した。確認調査は平成16年12月15日～12月27日にかけて実施した。

その結果、建設予定地内に昭和45年に建設され、平成13年に撤去された水道局電気管理棟の建物跡が確認された。この建物により予定地の約1/2が破壊を受けていたが、残部において井戸跡、武家屋敷に伴うと考えられる柱穴跡が検出された。

のことから予定地内に埋蔵文化財が確認されたため、市下水道課と計画変更等の協議を行った。その結果、組織統合は市の機構改革において事業の着手を早急に進める必要があり、また計画地のその殆どが破壊を受けていたことから計画の変更は不可能との見解に達し、上下水道部の経費負担によって確認調査で検出した井戸跡を中心とする予定地の本調査を行い、記録保存措置をとることとなつた。発掘調査は約120m<sup>2</sup>を対象とし、平成17年1月7日～平成17年3月1日の期間で実施した。

## 第2節 調査の組織

延岡城内遺跡（第13次）の調査組織は次の通りである。

調査主体 延岡市教育委員会

教育長	牧野哲久
教育部長	杉本隆晴
文化課長	渡邊博吏
文化課主幹兼文化財係長	九鬼勉
文化課副主幹兼文化振興係長	黒木育朗
庶務担当	下水道課主査 野下美智江
	文化課主任主事 松岡直子
調査担当	文化課主任主事 高浦哲

調査作業員 安藤登美子、甲斐カツキ、甲斐正子、甲斐理司、甲斐三千代、甲斐如高、川野尚子、酒井清子、林田裕子、松崎辰磨

整理作業員 敷石サヨ子、藤本千鳥、山本敬子

発掘調査・資料整理に際しては、延岡市水道局・延岡市土地開発公社をはじめ周辺住民など関係各位のご協力を賜った。また、経費確保・執行に際しては、上下水道部公営企業移行対策監 濱村滋夫氏、下水道課主査 野下美智江氏、同課主任主事 山本陽一氏に格別のご配慮をいただいた。記して感謝します。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野地古墳の所在する延岡市は、東経 $131^{\circ} 40' 03''$ 、北緯 $32^{\circ} 34' 43''$ で宮崎県の北部に位置し、北は北川町・北浦町、西は北方町、南は門川町の4町と境を接し、東は日向灘に面している。東西27.6km、南北26.4km、面積283.82km<sup>2</sup>の市域を占めている。北は600m~700m級の鏡山・可愛岳等の山々が、西は800m~1,200m級の行勝山・桧山・榎峰等の山々が、南は300~360m級の遠見山・烏帽子岳等の山々が連なっている。市東部は海岸線で、北に日豊海岸国定公園に指定されているリアス式海岸が広がり、中部には、県指定天然記念物のアカウミガメが産卵のため上陸する長い砂浜が広がっている。南部は、日向灘に向かって小半島が突き出し、リアス式海岸を形成している。平野部は市域面積の約30%で、市の北と西から流れ込む北川・祝子川・五ヶ瀬川・沖田川の下流域に広がっている。

延岡城内遺跡は、市の中央を流れる五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた通称川中地区に所在している。川中地区は官公庁や学校、企業をはじめ宅地が集中し延岡市の中心地となっている。また一方では、市のシンボルである延岡城を中心に、西の丸（現内藤記念館）や江戸時代に整備された町割り、カラミ煉瓦塀（藩主内藤氏により経営されていた日平銅山から产出される残滓でつくられた煉瓦）などが残る歴史的景観を有する地区として都市景観形成地区に指定されている。今回の調査地は、延岡市水道局内の一角にあたり、現在は駐車場として利用されている場所にあたる。



Fig. 2 調査地位置図 (1/25,000)

## 第2節 延岡城と周辺調査

延岡城に関する発掘調査の歴史は、内藤延岡4代藩主政沼によって行われた西ノ丸調査が最初と言われている。大正～昭和にかけては、延岡城二ノ丸北曲輪（牧水広場）の東斜面から横穴3基が確認されている。詳細は不明であるが土器・金環類が出土している。

平成元年度から延岡城公園整備がスタートし、それに伴い平成3年度から延岡城の調査を実施している。北大手門調査では、門礎石の基礎（桁行約5.4m、梁行2.7m）、平瓦を用いた排水溝、門番の番所跡が確認されている。この他、門の両側の石垣からは堀廻の屋根が接していたことを示す溝が見つかっている。またこの石垣には刻印と呼ばれる記号が400以上刻まれており、刻印の意味・役割を検討する上で重要な資料となっている。北大手門を登った二ノ丸口では2ヶ所の井戸跡が検出された他、本丸下に三ノ丸へと延びる石垣が検出されている。本城で最大の面積を持つ二ノ丸の調査では、両長軸に緑色岩の立石を伴う弥生時代後期の土壙墓1基が検出され、鐵鏹1本が出土している。この他、礎石建物跡の一部、城内最大規模の井戸、石組の排水溝（または通路造構）、直径5mにも及ぶ瓦溜が検出されている。また、二ノ丸北曲輪（現管理棟）からは石列造構や、動物園の基礎跡や猿ヶ島跡が確認されている。二ノ丸～本丸へ登る階段部付近の調査では、階段跡の一部や阿蘇溶結凝灰岩を方形に加工した根石を伴う掘建柱門跡（長坂御門）、石垣に沿って土壙の基礎が確認されている。この他、階段部中央で排水造構が確認され、階段を登り切った曲輪では、絵図に描かれている小石垣の裏込めグリ石が検出されている。また、長坂御門から左に折れた園路部では南北に通路を遮断するように造られた中世期の堀切が検出されている。これにより、中世の城郭として機能していたことを伺わせる資料が初めて確認されている。本丸北東に位置するトイレ改修に伴う調査では、石垣に沿って土壙の控柱跡が検出されている。本丸から天守台へ登る通路では階段跡を検出している。天守台の調査では、東法面からは絵図に記載があるよう階段跡が確認されている。

延岡城南下駐車場（中小企業センター裏）の調査では、米蔵や武具蔵の基壇跡や溝状造構、柵列跡が検出されている。カルチャープラザのべおか（図書館）建設に伴う調査では、東西方向に築かれた土堀の堀（内堀）が検出されている。この堀の土手には、長さ約1.5mの松杭が打ち込まれ、間には栗石が敷き詰められ護岸とされていた。また、高橋元種時代に描かれたと考えられる「日州縣ノ図」（臼杵市立図書館蔵）にのみに記載のある南北方向の内堀が、東西堀と「L」字形に接するよう確認された。この他、馬屋跡や井戸跡、中世の掘建柱建物跡が検出されている。さらに調査から、県内初となる弥生時代後期後半の足跡や矢板、鍔などの木製農耕具が出土している。

本小路通線道路改良工事に伴い生じた、水道局電気室移転に伴う発掘調査（延岡城内遺跡I（3次））では、溝状造構や井戸跡、石垣造構、大溝造構が検出されている。特に大溝造構は絵図史料に記載のないものであり、本城下の内堀に続くものか、延岡城の普請と作事に関係するものとして考えられている。また、同道路改良工事に伴う発掘調査（第4次）では、絵図にある清水口門の礎石が検出され、城域の西端を決定する結果が、また第5次調査では、延岡城北側に築かれた内堀跡の一部を確認し、城域の北端を決定する結果が得られている。また各調査地において、造構の確認は出来なかつたが、弥生時代の遺物が大量に出土している。

城下南町の調査では、間口が狭く奥行きが長い典型的な短冊形の町屋造構の一部や、建物間を流れる水路跡、水路に下りる階段跡が検出されている。中町通り整備工事の際には弥生時代後期後半の土器類が確認されている。

これらの本城、西ノ丸及び周辺の調査から、延岡城の位置する川中地区は、弥生時代から江戸時代にかけての遺跡が残る遺跡群として捉えられている。



Fig. 3 延岡城および周辺調査地位置図 (1/5,000)

## 延岡城発掘調査一覧

No	調査次	名 称	調査種別	調査年
1	第1次	内堀（第1次）	確認調査	平成4年
2	第2次	北大手門	確認・本調査	平成4年
3	第3次	二ノ丸口・二ノ丸西垂輪	確認調査	平成5年
4	第4次	二ノ丸（第1次）	本調査	平成5年
5	第5次	内堀（第2次）	本調査	平成5～6年
6	第6次	行黒の遠広場	確認調査	平成6年
7	第7次	内堀（第3次）	本調査	平成6年
8	第8次	天守台	本調査	平成6～7年
9	第9次	二ノ丸（第2次）	本調査	平成7年
10	第10次	本丸階段	本調査	平成8年
11	第11次	本丸長屋（第1次）	確認調査	平成9年
12	第12次	西ノ丸東虎口	確認調査	平成9年
13	第13次	本丸長屋（第2次）	本調査	平成10年
14	第14次	牧水広場	確認調査	平成10年
15	第15次	林友寮	確認調査	平成10年
16	第16次	二階門	本調査	平成11年
17	第17次	中金センター南	本調査	平成11年
18	第18次	二ノ丸口・三ノ丸	本調査	平成11年
19	第19次	末蔵・武具蔵	本調査	平成12年
20	第20次	天守台登口（第1次）	本調査	平成13年
21	第21次	末蔵・武具蔵（第2次）	本調査	平成13年
22	第22次	天守台登口（第2次）	本調査	平成14年
23	第23次	末蔵・武具蔵（第3次）	本調査	平成14年

## 延岡城内発掘調査一覧

No	調査次	名 称	調査種別	調査年
24	第1次	旧図書館前	確認調査	平成11年
25	第2次	健康管理センター前	本調査	平成11年
26	第3次	水道局	本調査	平成12年
27	第4次	清水口	本調査	平成12年
28	第5次	北内堀	本調査	平成12年
29	第6次	水道局前	本調査	平成13年
30	第7次	カルチャーブラザ前	本調査	平成13年
31	第8次	武家屋敷	確認調査	平成13年
32	第9次	北内堀	確認調査	平成14年
33	第10次	内藤記念館南	確認調査	平成15年
34	第11次	カルチャーブラザ北	確認調査	平成16年
35	第12次	水道局	確認調査	平成16年
36	第13次	水道局	本調査	平成17年

第1表 延岡城および周辺調査地一覧表

## 第3章 延岡城の歴史

### 第1節 延岡城と藩主の変遷

延岡城は延岡市はもとより、宮崎県を代表する近世城郭である。天正15年（1578）、豊臣秀吉の命により53,000石で原（延岡）に入封した高橋元種は松尾城に入った。元種は慶長5年（1600）、関ヶ原の合戦で西軍方に属していたが、東軍に転じたことから本領安堵となり領地没収を免れた。合戦後松尾城に戻った元種は、鉄砲の普及による近代的戦法に対応するため、石垣や水堀を主体とする近世式城郭の必要性を痛感し、慶長6年（1601）～慶長8年（1603）にかけて県城（延岡城）を築城した。

延岡城は、五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた標高約53mの丘陵に築かれた平山城で、「県城」「亀井城」とも称されている。城の南北を流れるこの二つの河川を天然の外堀とし、丘陵裾に内堀、城の東に位置する城下町との境には、南北に堀や土居が造られている。城郭は丘陵に石垣を築き、本丸、二ノ丸、三ノ丸の三区から成る本城（城山公園）と、本城の西に築かれた西ノ丸（内藤記念館）の二郭から構成されている。本丸と二ノ丸の間に築かれた高さ約22m、総延長約70mの石垣は本城最大規模で通称「千人殺し」と称されている。「千人殺し」とはその規模、構造から石垣の隅石を外すことで、千人の敵を倒すことができるとの伝承からこの名称がつけられたと言われている。また、高橋元種は本格的な城下町造りに着手し、城の東に北町、中町、南町が整備され、現在の延岡市街地の基礎が築かれている。武家屋敷としては五ヶ瀬川の北に北小路、本城の南北に本小路、桜小路が完成されている。このように延岡市街地の基礎を造った元種であるが、慶長18年（1613）罪人隠匿の理由で改易されている。

高橋氏が改易された後、肥前国日之江城（長崎県北有馬町）から有馬直純が、53,000石で入封した。有馬氏は直純、康純、永純と三代続き、この間に延岡城と改名された。明暦2年（1656）、藩主有馬康純が今山八幡宮に寄進した梵鐘に「日州延岡」の文字が刻まれており、延岡の名が見られる最古の史料となっている。またこの頃、城下町も大幅に拡張整備された。元和元年（1615）、直純により元町、組屋町、博労町の三町が整備された。1655年（明暦元）、康純の時に柳沢町ができ、ここに「延岡七町」と称される城下町が完成した。本城も承応2年（1653）～明暦元年（1655）にかけて大修築が行われ、本丸東側に天守閣の機能を有する三階櫓、本丸の枱形に二階門櫓等が完成している。しかし、天和2年（1682）（天和3年の説あり）、本小路の武家屋敷からの火災により三階櫓等が焼失している。以後、城郭の復興は行われたが三階櫓は再建されなかったことが古文書によって確認されている。元禄3年（1690）、永純の時、藩領であった山陰・坪谷（宮崎県東郷町）の百姓1,422人が郡国の大鍋藩へ逃散する山陰百姓逃散一揆が起こった。有馬氏はこの事件がもととなり、元禄5年（1692）、無城地であった越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）に転封となった。

元禄5年（1692）、日向国初の譜代大名として下野国壬生（栃木県壬生市）から三浦明敬が23,000石で入封した。同時にそれまでの藩領であった、富高（宮崎県日向市）や穗北（宮崎県西都市）、坪谷（宮崎県東郷町）など30,000石が天領として分離された。三浦氏は23,000石と歴代延岡藩主の中でも最小の大名であった。正徳2年（1712）、三河国刈谷（愛知県刈谷市）へ転封となった。

その後を継いだ牧野氏は、三河国吉田（愛知県豊橋市）から天領であった領地を回復し、さらに豊後の大分、国東、速見に飛び地を領有し、延岡藩最大の80,000石で入封した。牧野氏は成央、貞通の二代が続いた。藩領は増加したものの、この当時の藩財政は窮乏しており、このため新田開発、殖産興業等が必要となった。こうした背景から、亨保9年（1724）に家老藤江監物が郡奉行江尻喜多右衛

門に命じて岩熊井堰工事を実施した。この事業は五ヶ瀬川を堰き止めて、当時水利の便が悪く水田の乏しい出喜多（出北）村に用水を引くという大工事であった。洪水等度重なる失敗により、藩の財政は更に悪化し、藩内では恨みを持つものも現れた。亨保16年（1731）、藤江は三人の息子と共に捕らえられ、舟之尾（宮崎県日之影町）の牢で非業の死を遂げた。工事は中止論もでたが、後を受けた江尻喜多右衛門は工事を続行し、着工から10年後の亨保19年（1734）、井堰と用水路を完成させた。その結果、出喜多（出北）村、恒富村の田地131町（約131ha）が灌漑されることとなった。改修は行われているものの、現在もこの用水路は活用され豊かな延岡平野の礎となっている。寛延2年（1749）、牧野貞通は京都所司代の要職につき、藩領のうち児湯郡、宮崎郡のうちの30,000石は河内国、丹波国、美濃国において引替えとなり、再び天領となって日田代官支配下に置かれた。延享4年（1747）、貞通は弊遠の日向では不便なため常陸国笠間（茨城県笠間市）へ転封となった。これに伴い笠間の井上氏は陸奥国磐城平（福島県いわき市）へ、磐城平の内藤氏は日向国延岡へと三角転封が行われた。

延享4年（1747）、内藤氏が70,000石で入封し、政樹、政陽、政脩、政韶、政和、政順、政義、政拳と8代にわたり明治の魔藩置県まで延岡を治めた。延岡最初の藩主政樹は、灾賀磐城平藩と同じ70,000石で入封したが、飛び地や山野が多いことから20,000石程の減収と言われた。内藤時代には飢饉等の災害もあり慢性的な財政赤字に苦しみ、度々借約令を出し、家中の知行扶持削減を断行、また一方では藩札の発行などを行った。しかし、これらの諸策は成功せず、延岡商人や大阪の豪商の財力に頼らざるを得ない状況であった。このような藩財政であったが歴代の内藤延岡藩主は学問等の興隆に力を注いでいる。政樹は数学・天文学を愛好し、數学者である久留島喜内や松永良弼などを登用した。また、俳人でもあり父義英（露沾）に俳諧を学んで俳号を沾城とした。露沾に師事した家臣も遂行したことから俳諧が盛んに行われた。続く政陽は、明和5年（1768）、本小路に学問所（学寮）、武芸所（武寮）を設置し文武の振興を図った。政脩の時代には、天明の大飢饉が起り藩の財政はさらに窮乏していった。特に須恵江村（延岡市須美江町）の被害は大きく、農民の逃散が危惧された。そこで藩では天明7年（1787）、町人見屋の小出氏に知行300石で本郷方下役を与え須恵江村の復興を請け負わせている。政韶は考古学に関心を持った人物で、西ノ丸や古墳の発掘調査を行い「集古採覧」を記録したと言われる。政和は20歳という若さで没した。続く政順は、文化年間に江戸藩邸に藩校「崇徳館」を開設したが、財政窮乏により閉鎖をやむなくされた。続く政義は、彦根藩（滋賀県彦根市）主で幕府大老の職にあった伊井直弼の弟にあたる。直弼の姉の允姫（繁子）は、政順の正室で、後に允真院となった人物である。この頃の藩内は、天保12年（1841）、嘉永元年（1848）と飢饉が続き、蔵米の放出穀物による酒造禁止や新田開発が行われている。また、西洋砲術を導入し、嘉永2年（1849）、加納（Cannon, カノー）砲4門を海岸部に設置している。この他、嘉永3年（1850）には学寮を拡張して広業館に改称、安政4年（1857）には藩内の南町に医学所明道館を開設している。延岡藩最後の藩主政學は、11歳で家督を継いでいる。政學は挙藩体制で領海防備に臨み、元治元年（1864）、慶応2年（1866）に第1次、2次長州征伐へ参加している。2次の出兵では町・村ごとに多額の軍用金を課し、また郷人足を徵発している。慶応3年（1867）に、第15代將軍徳川慶喜の大政奉還を受け、日向国内の幕府領を他藩とともに預かった。同年12月、大政復古の大号令の後、慶応4年（1868）に鳥羽・伏見の戦いに出兵、徳川氏の命により京都郊外の野田口の守備にあたった。明治2年（1869）6月、版籍奉還によって延岡藩知事となったが、明治4年（1871）、廢藩置県により藩知事を免職して東京府華族となり麹町隼人町に在住した。明治5年（1872）、明治の廢城令とともに各地の城郭取り壇しが行われ、延岡城では明治4年（1871）6月に「藩城ヲ廢シ榮園トナス」という記録が残っている。のことから、この時期に城の機能を廃止し、取り壇しが行われてと思われるが、

明治10年（1877）頃まで京口門が残っていたこと（内藤氏家令、小林天外氏の談）や、同年8月にあった西南の役の際、天守台の太鼓櫓が焼失した記録等が残っており、延岡城の破却についての詳細は分かっていない。その後政挙は明治23年（1890）、東京より帰郷し旧延岡市立図書館付近にあった内藤末蔵宅（内藤政義の末子、内藤氏下御殿とも呼ばれた）に居住し、明治25年（1892）2月に西ノ丸跡に屋敷（西ノ丸御殿）を新築し転居した。政挙は教育普及事業に尽力し、明治6年（1873）1月4日に延岡社学（現岡富中学校付近）を設立（明治8年亮天社と改称）、明治36年（1903）4月の県立延岡中学校設立に伴う廃校まで支援した。また、女子教育にも力を注ぎ、明治9年（1876）4月に亮天社附属として女児校舎を建設、明治34年（1901）4月に延岡女学校と改称された。昭和2年（1927）の政挙没後、昭和4年（1929）敷地建物を県に寄付し県立延岡高等女学校となり、戦後の学制改革まで続いた。

延岡城は、明治40年頃には市民に開放されたとみられ、城内で撮影された写真が残っている。昭和9年（1924）4月、内藤政道氏から延岡市制施行を記念して延岡城跡の寄贈を受けた。また昭和14年（1939）8月には、西ノ丸土地邸宅及び附属施設等の寄贈を受けたが、昭和20年の戦災により邸宅等の殆どが消失した。昭和38年、市制施行30周年記念事業として西の丸跡地に内藤記念館を建設し、現在は市民に開放されている。一方、延岡城跡も戦後、市民動物公園として猿ヶ島などの整備や遊具施設が設置され市民憩いの場となっていたが、昭和63年（1988）にその殆どが解体されている。



PL. 1 有馬家中延岡城下屋敷付絵図（1970～1683年）

## 第2節 延岡城関係年譜

西暦	和暦	月日	事項
1446	文安3	10月	土持宣綱は、松山町に松尾城築城
1496	明応5	8月	土持氏と伊東氏は、東海村夏田付近で合戦し、伊東方は敗北
1496	明応5	9月	再び伊東氏が侵入し、小畠海(筆目橋付近)で合戦、伊東氏は敗北し門川城を離脱
1535	天文4	12月	門川城主と土持氏が協力し、伊東氏に対抗
1573	天正元年	不詳	伊東氏の勢力を背景に、機造和尚が恋島に曹洞宗祐国寺創建
1577	天正5	2月	土持親成が門川城の米良氏を攻め、門川町祇園馬場で合戦し、土持氏は敗北
1577	天正5	不詳	川島町の熊野権現神社が火災のため焼失
1578	天正6	1月	鳥津義久は土持親成に石塚百余町を附加し、土持安統に御手洗10町を付与
1578	天正6	4月	大友宗麟が豈後から南下し白杵右衛門等を先鋒として日向入り。無鹿町に軍營を築き、土持氏の松尾城を陥れた。親成の子信成は鹿座に逃れ、高信は妙町で自刃した
1586	天正14	12月	豊前国春岳城主(福岡県田川市)高橋元種は、九州平定を進めていた豊臣軍の攻撃を受け降伏
1586	天正14	不詳	土持親信は、吾田に戻り旧臣を集め、鳥津氏と謀り大友氏の打倒を謀った
1587	天正15	4月21日	鳥津義久は豊臣秀長に降伏し、九州平定がほぼ終了
1587	天正15	5月	豊臣秀吉は日向の諸侯を封じ、高橋元種は豊後を拝命
1591	天正19	4月	高橋元種は三田井親武(高千穂町)が反抗したため、官水(高千穂町)で滅ぼした
1591	天正19	不詳	川島町の熊野権現神社を再興
1598	慶長3	11月	高橋元種は三田井氏の道臣を討ち、領内を平定
1600	慶長5	10月	鹿屋家族は伊東祐兵に命じ、相良、秋月、高橋の諸氏を通じて鳥津氏を伐たせた
1600	慶長5	10月	高橋元種は開ヶ原の戦に出陣し、西草方として岐阜大坂城の防衛に当たったが、東軍方に転じ本領安堵
1600	慶長5	10月	伊東祐兵が宮崎城を攻め、城主椎藤種盛父子は被死
1600	慶長5	10月	高橋元種は、53000石で入封し松尾城に入った。県城?、門川城(門川町)、瀬見城、日知屋城(日向市)、宮崎城(宮崎市)を領した
1601	慶長6	不詳	高橋元種は県城(延岡城)の築城に着手。城内にあった愛宕社を恒富町に移動した。県城の規模、東西百三十間、南北八十間、六千六百七十六坪、京口門、日向口門、野田口門、川原口門、肥後口門、豊後口門
1603	慶長8	秋頃	高橋元種は松尾城から県城に移った。北町、中町、南町の城下町、本小路、北小路、桜小路の武家屋敷を整備
1605	慶長10	2月	高橋元種は岡富八幡宮を再興
1605	慶長10	9月	高橋元種は行謙山の熊野人明神(行謙神社)に鰐口寄進
1607	慶長12	10月	今山八幡宮で神事能あつた
1611	慶長16	4月	唐町に松山山妙恵寺(淨土真宗)を創建
1613	慶長18	10月	高橋元種は、罪人匿の罪に問われ、領地を没収され陳炎国御倉(福島原棚倉町)立花宗茂に預けられた
1614	慶長19	11月	有馬直純が大坂冬の陣に出陣した
1614	慶長19	7月	肥前国日之江城(長崎県北有馬町)の有馬直純が53000石で県(延岡)に入封
1614	慶長19	不詳	肥前国有馬山城三寺を大賀町に移して二岸山白道寺と称した
1615	元和元	不詳	有馬直純は川北地区に元町、細屋町、博労町を整備
1638	寛永15	1月	屋原の乱起り、蘿主直純は江戸から、子康純は黒から出陣
1646	正保3	9月	有馬康純が阿闍天満宮(鬼井神社・天神小路)を創建
1651	慶安4		御本丸の修整工事を提出
1652	承応元	3月	石垣普請開始
1653	承応2	5月	有馬康純が小山山光勝寺に梵鐘寄進
1655	明暦元	6月	城の修復が完成し、二階櫓、三階櫓等が完成
1655	明暦元	不詳	柳沢町整備され、所謂延岡七町完成
1656	明暦2	6月	有馬康純が蓬莱山八幡宮(今山八幡宮)に梵鐘を寄進。梵鐘には「日州延岡城主有馬左衛門佐從五位上藤原朝臣康純」とあり延岡の地名が記された最古の資料
1661	寛文元	9月	日向地震が起き、宮崎郡、耶珂郡方面被災甚大
1667	寛文7	不詳	板垣櫓が完成。長さ六十九間三尺、幅二間。南町今井又四郎が渡り初め
1681	天和元	4月	延岡大雨にて御本丸東方坂石垣少々崩落
1683	天和3	2月	木小路から出火し城内に延焼、武家屋敷21軒、廻32間半、三階櫓等焼失、石垣崩落(天和2年)

第2表 延岡城関係年譜1

西暦	和暦	月日	事項
1683	天和3	3月	大雨により、西ノ丸御長屋崩落、長屋下石垣長さ11間、高さ4間共に崩落（天和2年説もあり）
1686	貞享3	不詳	延岡城樊方削土台下石垣1カ所、三の丸北の方石垣一カ所崩倒に付、修繕願いを提出
1689	元禄2	7月	洪水により板垣塗流失
1690	元禄3	9月	山陰村（東臼杵郡東郷町山陰）で百姓逃散事件起きた
1691	元禄4	12月	有馬永純が無城の地越後国糸魚川（新潟県糸魚川市）に50000石で移封
1692	元禄5	2月	下野国壬生城（栃木県壬生町）の三浦明敏が3000石を加増され、延岡藩初の譜代大名として23000石で入封
1694	元禄7	不詳	大町町の三福寺を現在地（北町）に移動
1700	元禄13	9月	岡藩（大分県竹田）との辻山境界争は、延岡藩の勝訴（尾根境界説）で終了
1707	宝永4	10月4日	宝水地図 本丸禮瓦所々落申候、同堀瓦所々落申候、帝都門棲丸落申候、同所石垣一カ所崩申候、同所一カ所露申候、同所堀所々落申候、同所多門之前長八間余幅三寸ほど地割申候、其外城中所々地割申候、城下町屋十二軒半済、内一軒済申候、同所土蔵二十五軒大破、内一軒済申候、津波被災有る、坂下門庭石垣破損、同所堀下石垣同前、其外所々御家中舗造共に破損、三ノ白
1712	正徳2	7月	三浦明敏が三河国刈谷（愛知県刈谷市）に移封した
1712	正徳2	7月	三河国吉田（愛知県豊橋市）の牧野成央が延岡藩最大の80000石で入封。飛地として後後の火太郡、國東郡、足見郡及び日向国宮崎郡を領した
1724	享保9	不詳	出北村（出北・別院地区）の滋潤のため、家老藤江監物が都奉行の江尻喜多右衛門に命じて岩熊井頭及び用水路の工事を着手させた
1731	享保16	8月	藤江監物は單用金流用の嫌疑により幽閉され、七折村舟の尾（日之影町）の獄中にて死去
1734	享保19	不詳	引熊井渠及び用水路が完成し、田畠12町1反5畝23歩増加
1747	延享4	4月	馬場貞宣が常陸国笠間（茨城県笠間市）へ、笠間の井上氏は陸奥国磐城平（福島県いわき市）へ、磐城平の内藤政綱は延岡藩（70000石）へ移封する三方替えが行われた
1750	寛延3	8月	石垣築直彌渡懸いを提出
1768	明和5	2月	内藤政陽が城内本小路に学寮、武寮を創設した。山本与兵衛を監督、白瀧道順を講師、佐久間左膳を儒學執行に任じた
1769	明和6	7~8月	地震及び大雨によって石垣、土塹など多数破損。御本城内 長坂御門屋根崩落、同所高石垣南の方角石折損二間高さ二間半崩、御太鼓矢倉登坂左右石垣北ノ方高八尺ニ三間南の方角石折損九尺ニ三間崩、同所南之方御土蔵上通石垣高サ二間ニ五間崩、同所北ノ方石垣式カ所高サ一間ニ四間半崩土手五尺ニ七間崩、二階御櫓石垣もめ中軒、塙壁復瓦屢等大方損申候、 西御丸内、向御番所取附等十二間崩但六尺船舷共ニ、同所堀下石垣三間半崩、同所南裏表十八間五尺崩、同所裏御門御番所土手五間崩古崩れ共、同所御門取附等西の方九間半崩、同所新御殿表酒込中口迄崩十七間崩、同所本ノ方役所縁下石垣二間崩程、同所表之間北の方石垣二間余残、同所東表御武者御門迄十九間一尺半済、同所堀下石垣十九間半高サ四間ノ内二間半ニ二間崩れ之分孕出、同所向御番所下石垣押出、同所表下御門外懸照ヶ下石垣六間半崩懸掛ケ共破損、同所御門北の方石垣折損三間半崩、御馬屋向丸土手石垣二カ所メ十三間崩、同所上手十一間崩、往来御長屋二カ所石垣九間ニ二間崩、同所御長屋石垣十四間崩、下御駄馬場入口大路崩左右取付堀七間程半済。
1770	明和7	2月	石垣修理懸いを提出
1793	寛政5	11月	大火があり、博劳町、元町、龜原町の104軒焼失
1810	文化7	4月	伊能忠敬が測量のため延岡に来訪
1812	文化9	6月	伊能忠敬が測量のため延岡に来訪
1815	文化12	1月	江戸蕃邸にて学問所として崇徳館を創立
1850	嘉永3	5月	学問所を広兼館に改称
1852	嘉永5	10月	石垣修理懸いを提出
1854	安政元	11月5日	最後本道震源の地震発生。西御輪石垣崩落し切通し通行不能。御本城内 御三階石垣土崩現瓦八間落、石御門倒れ、長坂御門棟丸一間落、南御橋右岸少々抜、渡波船北之方強少々損、西御丸内、切通上手石垣共高三間横四間崩、内土手二間石垣一間、中腰門曲り左右石垣崩、向番所大破、同所石垣南之方高石垣共三間横四間崩、向番所北之方強六間瓦組、向番所北之方崩六間大破、同所南ヨリ西江沂源御台所上等中御門迄崩二十五間大破、御徒番所曲り、御玄関南北壁壁大破、唐之門ヨリ御広間前迄十四間地割レ、下御殿石垣壁大破、御用所内、御土蔵三カ所先附根井壁損共外剥々損、大部倒内 石垣北ヨリ西江沂源崩二十二間崩、等四間倒レ二間崩伏掛リ、本小路長屋西之方新二間倒レ、同所北之方第一間半伏掛リ、広兼館第二間伏掛リ、 三福寺内 同御院跡、御墓損、孝獻院様、右向断、転生院様 右向断、崇徳院様 右向断、玉垣不残損、のし立二間倒レ、孝獻院様、右向断、

第3表 延岡城関係年譜2

西暦	和暦	月日	事項
1857	安政4	4月	南町に医学所明道館を開設
1864	元治元	8月	第1次長州征討出兵
1866	慶応2	6月	第2次長州征討出兵
1868	明治元	1月	延岡藩兵は、暴動により京都郊外野出口の防衛を担当
1868	明治元	4月	内藤政舉は朝廷より謹慎を命ぜられた
1868	明治元	5月	内藤政舉は謹慎を解かれた
1868	明治元	8月	内藤政舉が延岡に戻った
1869	明治2	2月	豊後国内の延岡領と日向内国20700石余りと日田黒管轄36000石余りの交換を実施
1869	明治2	6月	版籍奉還により内藤政舉は延岡藩知事に任命
1869	明治2	7月	鹿児島県により延岡県が置かれ、内藤政舉は藩知事を免職され、東京府貴属となり9月に上京
1870	明治3	9月	中町照源寺を廢して妙専寺に、中町善教寺を廢して南町小林山光勝寺に合寺した。また、中町本誓寺を廢して三福寺に合寺
1871	明治4	11月	延岡県が廃止され美々津県設置
1871	明治4	6月	延岡藩史に「藩城ヲ廢シ藩園トナス」の記録あり
1872	明治5	11月	広業館廃止
1873	明治6	1月	美々津県が廃止され宮崎県設置
1873	明治6	1月	延岡学社（現岡富中学校敷地）設立
1875	明治8	1月	延岡学社は亮天社に改称
1876	明治9	4月	小林乾一郎の提唱により亮天社の一部に女児教舎設立
1876	明治9	8月	宮崎県は鹿児島県に併合
1877	明治10	2月	西南戦争が起こり延岡隊は薩摩軍に参加
1877	明治10	8月	西南戦争に伴う「和田越の決戦」があり延岡は陥落、延岡城の大太鼓櫓焼失
1878	明治11	2月	女児教舎は岡松豪谷郡跡池（現カルチャーパラザのべおかの一部）に移転
1878	明治11	不詳	城山公園太鼓櫓跡に今山八幡宮より先達を移設
1882	明治15	1月	川中地区で大火があり、南町、船倉町、中町、北町の474戸が焼失
1883	明治16	5月	宮崎県再配賦
1883	明治16	9月	洪水が起き、坂田橋流失
1886	明治19	9月	洪水が起き、大瀬橋などが流失
1887	明治20	8月	洪水が起き、桜橋、尊念寺橋、南町橋、新町橋などは流失し、大瀬橋は大破
1890	明治23	7月	坂田橋・大瀬橋の改修
1890	明治23	8月	内藤政舉は東京より戻り、旧図書館付近（内藤松藏宅・内藤政義木子で内藤の下脚殿？とも呼ばれた）に居住
1890	明治23	不詳	亮天社・女児教舎は内藤家に経営移管
1892	明治25	2月	内藤政舉は、西ノ丸に建設された御殿に引越
1893	明治26	4月	旧延岡官署跡に、前身の鹿児島人林区署延岡小林区署を開設
1901	明治34	4月	女児教舎を廃止し、私立延岡女学校開校
1903	明治36	4月	亮天社を廃止し、跡地に私立延岡女学校移転
1906	明治39	4月	私立延岡女学校は私立延岡高等女学校に改称
1915	大正4	2月	私立延岡高等女学校（現岡富中学校敷地）のカラミレンガ塀が造られた
1920	大正9	不詳	誓教寺が新小路に移転
1924	大正13	8月	大雨により大瀬橋流失
1925	大正14	6月	内藤家の投資により鉄橋の亀井橋開通
1928	昭和3	12月頃	須崎地区の埋立て完成後、延岡架橋組合によって一鉄橋（須崎橋）、二鉄橋（五ヶ瀬橋）の有料橋を架けた
1929	昭和4	4月	私立延岡高等女学校は県立延岡高等女学校として移管
1934	昭和9	3月	無料の須崎橋・坂田橋開通
1934	昭和9	4月	内藤家より城山公園の寄贈
1935	昭和10	11月	現坂田橋開通
1935	昭和10	9月頃	昭和天皇の行幸に備え、城山公園整備実施
1937	昭和12	7月	現安賀多橋開通
1938	昭和13	3月	県立延岡高等女学校寄宿舎建設のため、現水道局用地を取得

第4表 延岡城関係年譜3

西暦	和暦	月日	事項
1939	昭和14	10月	大雨により大瀬橋流失、須崎橋半壊
1939	昭和14	8月	内藤家より西ノ丸の寄贈を受け、内藤記念館として公開
1940	昭和15	8月	県立延岡高等女学校の寄宿舎完成
1942	昭和17	3月	内藤家より城山公園北側を青年学校用地として寄贈
1943	昭和18	9月	洪水のため須崎橋被害
1945	昭和20	6.29	延岡大空襲により大瀬橋・五ヶ瀬橋を含む市街地の多くが罹災し、現水道局にあった寄宿舎も焼失。
1945	昭和20		延岡城関連では西ノ丸の御殿・亀井神社が焼失
1945	昭和20	不詳	須崎橋・亀井橋の鉄骨は軍用に供せられた
1946	昭和21	3月	西ノ丸旧内藤記念館跡にNHKが中継放送所を開設
1947	昭和22	4月	延岡小学校がカルチャーブラザのべおか付近に開校
1947	昭和22	4月	橋災した県立延岡高等女学校の寄宿舎及び校舎の復旧工事完成
1948	昭和23	4月	学制改革により県立延岡高等女学校を廃し、県立岡富高等学校設置
1948	昭和23	6月	大瀬橋(木橋)完成
1949	昭和24	4月	県立高等学校的通学区域制実施に伴い、県立岡富高等学校を廃し、県立延岡恒富高等学校に統合。施設等は延岡市立岡富中学校に引き継がれた
1950	昭和25	1月	旧五ヶ瀬橋開通
1950	昭和25	4月	延岡役務者が現延岡市健康管理センターへ移転・新築
1950	昭和25	5月	キジア台風により大瀬橋流失
1951	昭和26	7月	城山公園に児童遊園地整備
1953	昭和28	4月	この頃、現水道局敷地に市上下水道建設事務所(後の水道課)が設置された
1953	昭和28	4月	旧須崎橋開通
1953	昭和28	5月	旧大瀬橋開通
1955	昭和30	8月	市制30周年記念事業として、(株)旭化成より野口記念館寄贈
1961	昭和36	4月	西ノ丸の一角に延岡測候所開設
1962	昭和37	3月	NHK中継放送所が北出町へ移転
1963	昭和38	10月	市制施行30周年記念事業として、西ノ丸のNHK中継放送所跡に市民会館内藤記念館建設
1963	昭和38	2月	城山公園の時刻鐘を新鋲、初代の梵鐘は内藤記念館に移転することとなった
1963	昭和38	3月	現亀井橋開通
1964	昭和39	11月	市制30周年記念事業として、(株)旭化成より市立図書館の寄贈を受け翌年1月開館
1965	昭和40	7月	現須崎橋開通
1970	昭和45	4月	水道局集中管理棟完成
1974	昭和49	4月	延岡小学校がカルチャーブラザのべおか付近から現在地に移転。
1977	昭和52	10月	延岡市社会教育センター完成
1980	昭和55	3月	現水道局本館完成
1983	昭和58	12月	水道局集中管理棟増築
1988	昭和63	4月	都市景形成モアル事業にかかる城山公園整備スタート
1993	平成5	3月	城山公園に北大手門(彌形門)整備
1993	平成5	3月	現五ヶ瀬橋開通
1997	平成9	2月	カルチャーブラザのべおか(延岡市立図書館)開館
1997	平成9	3月	延岡城跡保存整備基本計画策定
1997	平成9	4月	本小路通総改良事業スタート
1998	平成10	3月	延岡城跡を市史跡に指定
2000	平成12	3月	延岡測候所無人計測化
2001	平成13	3月	延岡測候所送信盤台及び自動観測機器設置
2001	平成13	3月	水道局集中管理棟撤去
2001	平成13	7月	官峰北部森林管理署延岡事務所(旧延岡管林署)閉鎖
2001	平成13	3月	水道局発電機室及び監視室完成
2002	平成14	3月	大瀬橋架け替えのため仮橋開通
2003	平成15	3月	旧大瀬橋撤去

第5表 延岡城関係年譜4

## 第4章 調査の概要

### 第1節 絵図史料からの検討

現在確認されている絵図史料から調査地の検討を行った。

有馬時代に描かれた有馬家中屋敷付絵図（明治大学蔵）では武家屋敷（町原三之允邸）が、牧野時代に描かれた日向延岡城絵図（茨城県笠間神社蔵）では、役所的な機能を果たしていた會所が描かれている。また、明治維新前後に描かれた延岡藩士族屋敷図（明治大学蔵）では、武芸を教えていた武寮が描かれている。

絵図から調査区付近は、藩の一つの中心的機能の役割を果たしていた地域と考えられる。

### 第2節 調査の方法と基本土層

調査区は、水道局の駐車場として利用されているため、日常業務に支障を与えないよう配慮する必要があった。そのため調査区は、来客者通路を確保し、建物予定地における必要最小限の範囲で実施した。発掘調査において廃棄土の置き場が問題となるが、確認調査の結果から調査区内の約1/2が旧水道局集中管理棟建設によって造構の破壊を受けていたことから、調査区のアスファルト及び表土除去後、破壊地区に廃棄土を置くこととした。また、表土及び不要堆積土除去により生じる廃棄土は、事前に隣接する旧営林署跡地へ一時仮置きという措置をとった。

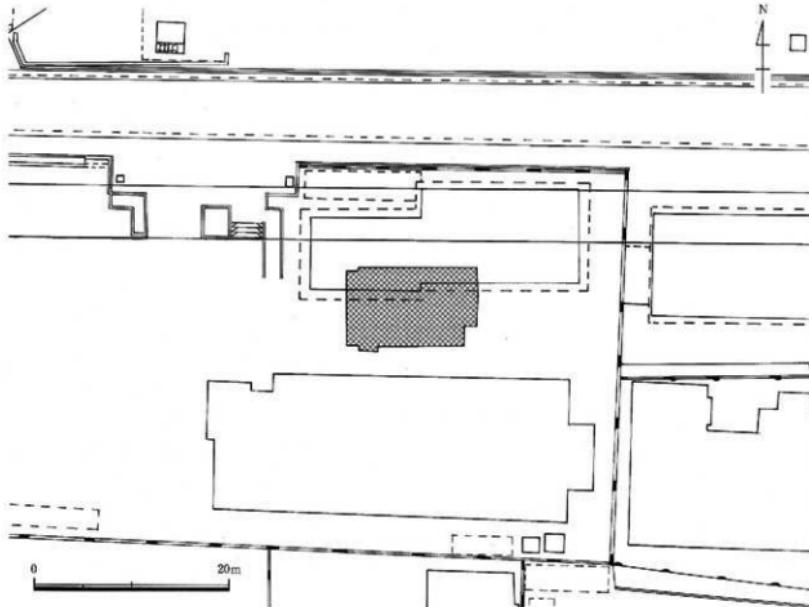


Fig. 4 調査区位置図 (1/500)

発掘調査は、確認調査の結果を基に包含層上部（第5層）まで重機で除去し、その後、調査区内に1m×1mのグリッドを設定し、人力による掘り下げを実施した。掘り下げは、確認調査で柱穴を検出した第7層を第1造構面として考え、面的に精査した後に随時記録し、1層ごとに下層へと掘り下げ精査・記録する方法を採用した。

調査区の基本土層は、確認調査のトレンチ土層図を基に、調査区南壁の土層を参考とした。本遺跡の基本層序は、柱穴内埋土を除外し概ね10層と判断した。

### 第3節 調査の概要

発掘調査は、確認調査で生じた廃棄土を旧宮林署跡地に運搬し、その後確認調査のトレンチを拡張する形で調査区の確保を行った。調査は確認調査での成果を生かし、近代の盛土と考えられた上位5層を重機により除去し、第7層上面を第1造構面として考えた。第6層より人力で掘り下げ、面的に精査を実施し、随時記録した後、下層へと掘り下げた。

調査の結果、第1造構面では柱穴跡及び、何を目的としていたかは不明であるが、地形的に台形状の張り出し部を検出した。土層観察からも、第6層において堆積の厚薄を確認することができた。

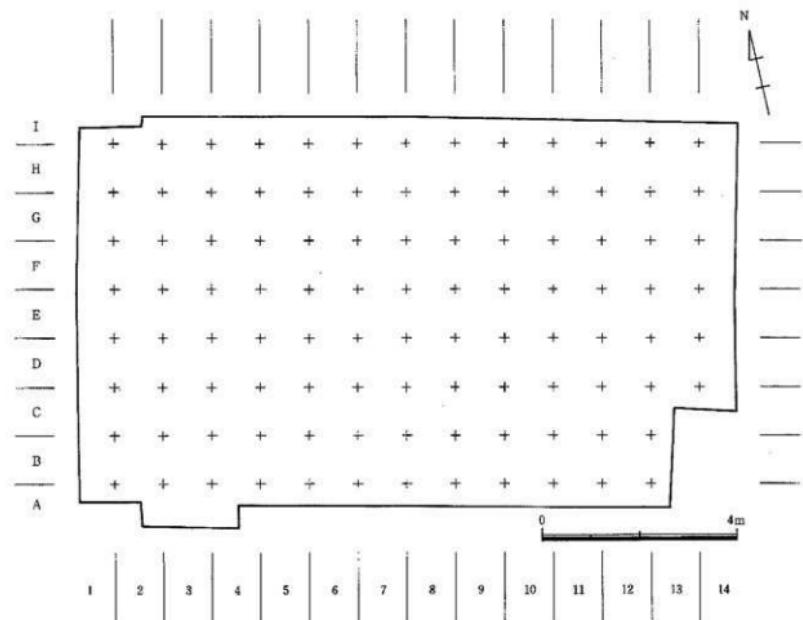


Fig. 5 グリッド配置図 (1/100)

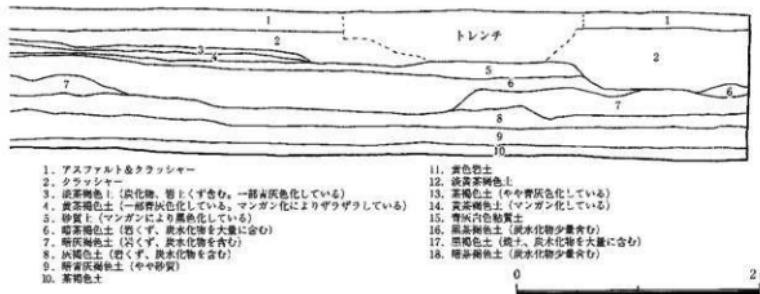
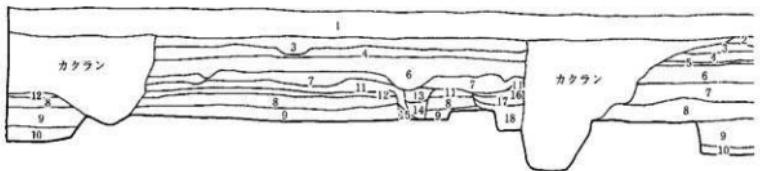


Fig. 6 南壁土層断面図 (1/40)

出土遺物は、第6層内より出土する遺物を年代の参考としたが、瓦片、陶磁器片、土師器片、土製人形、古錢、砥石、鉄製品、須恵器片、土錘など様々な遺物が混在する状況であった。また、第6層内には大量の焼土、炭化物が含まれており、様々な遺物が混在する状況から併せて考えると、調査地付近において何らかの原因で大火が発生し、その廃棄土が調査地一帯に造成されたものではないかと考えられた。統いて第2遺構面を検出するため、第7層を除去する作業を実施した。第2遺構面は、第8層上面と設定した。第8層は、井戸跡の検出面と合致する層にあたる。

調査の結果、精査により第1遺構面と同様に柱穴跡を検出した。また、焼土が集中して検出された焼土坑1基を検出した。またこの他に、井戸跡の南側に土坑を検出した。これは確認調査時に一部確認していたものであるが、調査を進める上に土坑の下部にさらにもう一つの遺構を確認した。

精査の結果、その遺構は今回確認した井戸を構築する前の井戸跡であることが明らかとなった。調査では、この井戸跡の内部壁面に大きな抉りが見られ、構築中に何らかの理由で内部壁面が崩落したため、構築を中止したものと考えられた。井戸跡上部より検出した土坑からは、38枚を数える洪武通寶が出土した。このことから土坑は、祭祀土坑であると考えられた。これらの結果を総合して考えると、井戸を構築中に井戸壁面が崩落したため構築を中止し、埋土後に祭祀による供養（洪武通寶を埋設した土坑）を行い、その後に新しく井戸を構築したものと考えられた。このことから井戸跡周辺にはもう一時期古い井戸跡が存在していることが明らかとなった。

出土遺物は、第7層内より出土する遺物を年代の参考としたが、やはり第1造構面同様に瓦片、陶磁器片、土師器片、鉄製品、須恵器片など様々な遺物が混在する状況であった。しかしながら、遺物量は全体的に少量であった。また各造構から遺物が出土している。まず、焼土坑からは炭化物とともに土師器の皿が出土している。また井戸跡南側より検出した土坑からは、前述の通り38枚を数える洪武通寶が出土している。新しい井戸内からは、陶磁器片や瓦片、土錘等が出土している。古い井戸跡からは、遺物の出土は見られなかった。

引き続き第3造構面を検出するため、第8層を除去する作業を実施した。第3造構面は、第9層上面と設定した。第3造構面は井戸跡周辺は掘り下げず、調査区中央で検出した配管による擾乱ラインより西側のみ掘り下げ実施した。その結果、この層上面でもこれまでと同様に柱穴跡を検出することができた。

出土遺物はやはり少量で、陶磁器片、土師器片、鉄製品、古銭が出土した。下層に進むにつれ、遺物量は確実に減少していった。

最後に第10層上面まで掘り下げ、造構検出を実施した。第9層より遺物の出土はあるものの、第10層上面での造構の存在は認められなかった。



PL. 2 南壁土層断面

## 第5章 調査の記録

### 第1節 第1文化層（7層上面）の検出遺構と遺物

#### （1）検出遺構

##### 柱穴群

調査区A～Dの1～11グリッド内で、大小19の柱穴を検出した。建物は掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。

##### 不明高壇部

調査区A-3～E-3、A-6～D-6から南に折れ曲がり、E-8へ向かう台形状を呈す不明な台形状の高壇部を検出した。A-4、5～E-4、5は一段下がり溝状を呈していた。建物間の区割り的役割を果たすものであろうか、現在のところは不明である。



PL. 3 第1文化層遺構検出状況



PL. 4 不明高壇部検出状況

#### （2）出土遺物

出土遺物は、6層に包含される遺物及び、柱穴内より出土した遺物がある。6層内からは瓦片、陶磁器片、土師器片、土製人形、古錢、砥石、鉄製品、須恵器片、土鍤など様々な様相の計189点の遺物が混在する状況であった。柱穴からは、陶磁器片、土師器片、瓦片等の計13点の遺物が出土している。

1は柱穴7から、2～33は、6層内に包含されていた遺物である。

1～8は、土師器の小皿である。器壁の内外面にススが付着したものが見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。9は、管状土鍤である。外面は灰褐色を呈している。長さ5.3cm、幅1.2cm、径は0.3～0.4cm、重量は7.5gを測る。10は、土製の犬と見られる。片耳と尾が欠損している。体長5.0cm、体幅2.0cm、体高は3.4cm、重量25gを測る。淡黄白色を呈している。

11は、緑色岩製の砥石で欠損品と見られる。中心付近が研磨されており、薄くなっている。

12は、銅錢である。摩耗が著しいが、真書で「熙寧元寶」の文字が見える。熙寧元寶は宋錢で、初鑄年が1068年とされる。

13～30は陶磁器で器種別に掲載した。13～15は碗と分類した。13は、17世紀の中国景德鎮窯系の染付碗である。花文様が施されている。14は、時期不明の中国か初期伊万里のものとみられる。文様が施されているが不明である。15は、17～18世紀の瀬戸・美濃系の天目茶碗である。16～17は、微細な破片のため器種確定が不明であるが瓶と分類した。16は、美濃焼と見られ内外面に長石釉を施す。内

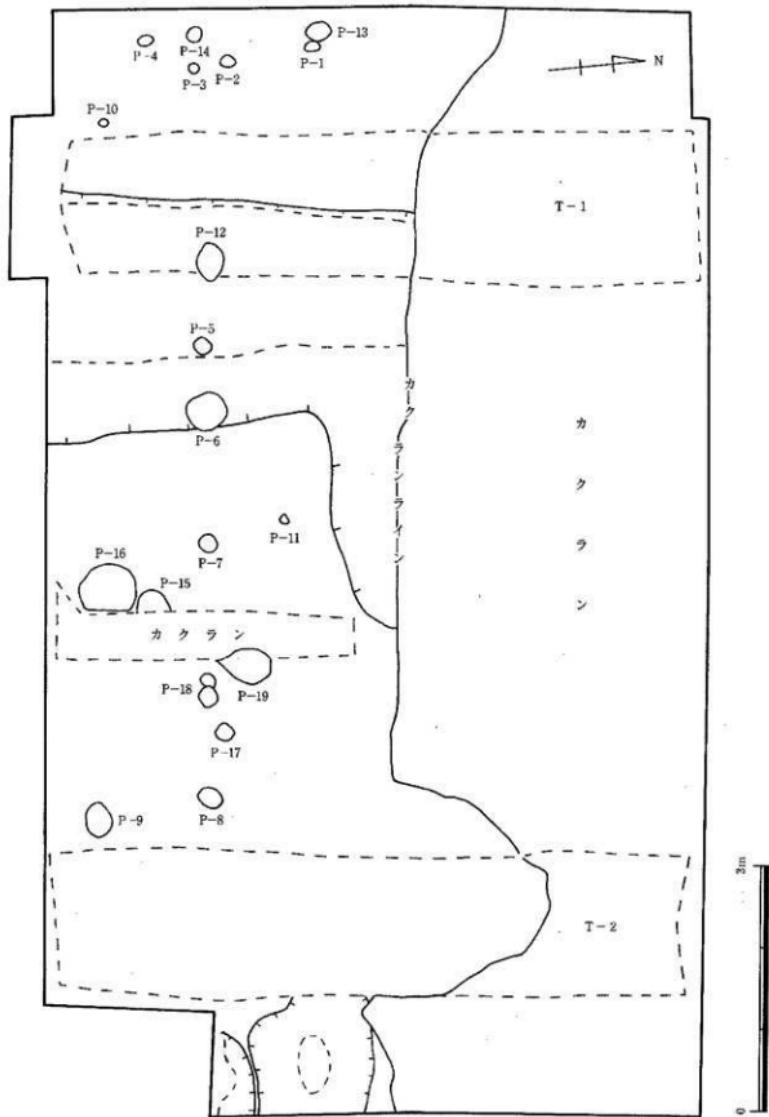


Fig. 7 第1文化層構造分布図 (1/60)

面器壁に調整痕か型押し痕が見られる。17は白磁の口縁部である。時期・産地不明である。18~24は皿と分類した。18は、16~17世紀の中国景德鎮窯系の染付皿である。高台外削りで、高台内に砂が付着する。見込みに文様が施されている。19は、16世紀とみられる中国の染付皿である。20は、陶器の皿で、時期は不明であるが関西系のものと見られる。口縁部にスヌが付着している。内外面に施釉が施され、貫入が見られる。21は、16~17世紀の中国景德鎮窯系の染付皿である。見込みに如意頭文を施す。豊付けは釉剥ぎとなっている。22は、時期不明であるが中国景德鎮窯系の染付皿である。内外面に文様が施されるが不明である。また、外面には鏡文様が施される。豊付けは釉剥ぎとなっている。焼成不良か、釉薬内に気泡が見られる。23、24は、17世紀後半の唐津の陶器皿である。内外面に灰釉が施され、貫入が見られる。25は、陶器の鉢と見られる。時期・産地不明である。内外面に施釉が施されている。底部に砂目が見られる。26は、15~16世紀の中国龍泉窯系の青磁盤と見られる。高台内蛇ノ目釉剥ぎとなっている。27~29は擂鉢である。27は、17~18世紀の備前のものと見られる。28は、17世紀後半の唐津のものである。口縁部に施釉が施される。29は、在地か関西系のものと見られる。時期は不明である。30は、時期・産地不明の陶器の片口である。施釉が施される。口縁部に重ね焼きをした目跡が残る。

31~34は瓦である。31、32は軒丸瓦で体部が欠損している。31は、瓦当径13.2cmを測る。左巻きの巴文で、巴文の周囲に圓線は巡らず、その外区に13個の珠文を配する。瓦当裏面の体部との接続部は、円に沿ってナデを施している。体部の凸面は、長軸方向にミガキが施されている。また、凹面は粗い布目痕を残している。32は、瓦当径14.2cmを測る。左巻きの巴文で、巴文の周囲に圓線は巡らず、その外区に13個の珠文を配する。瓦当裏面の体部との接続部は、円に沿ってナデを施している。体部の凸面は、長軸方向にミガキが施されている。また、凹面は欠損により不明である。33、34は鬼瓦の破片である。同一個体であろうか、表面に櫛目文が施されている。34には、「天上」の印刻が施されている。

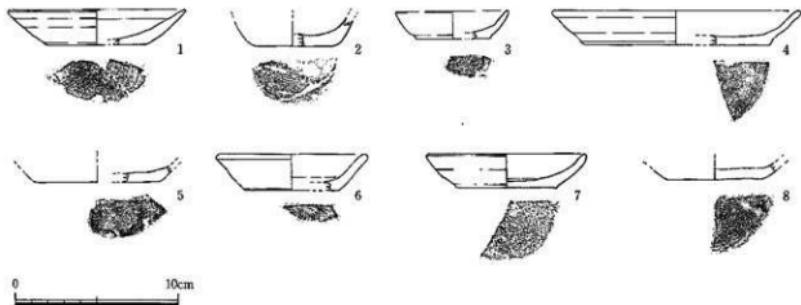


Fig. 8 第1文化財検出時出土遺物実測図1 (1/3)

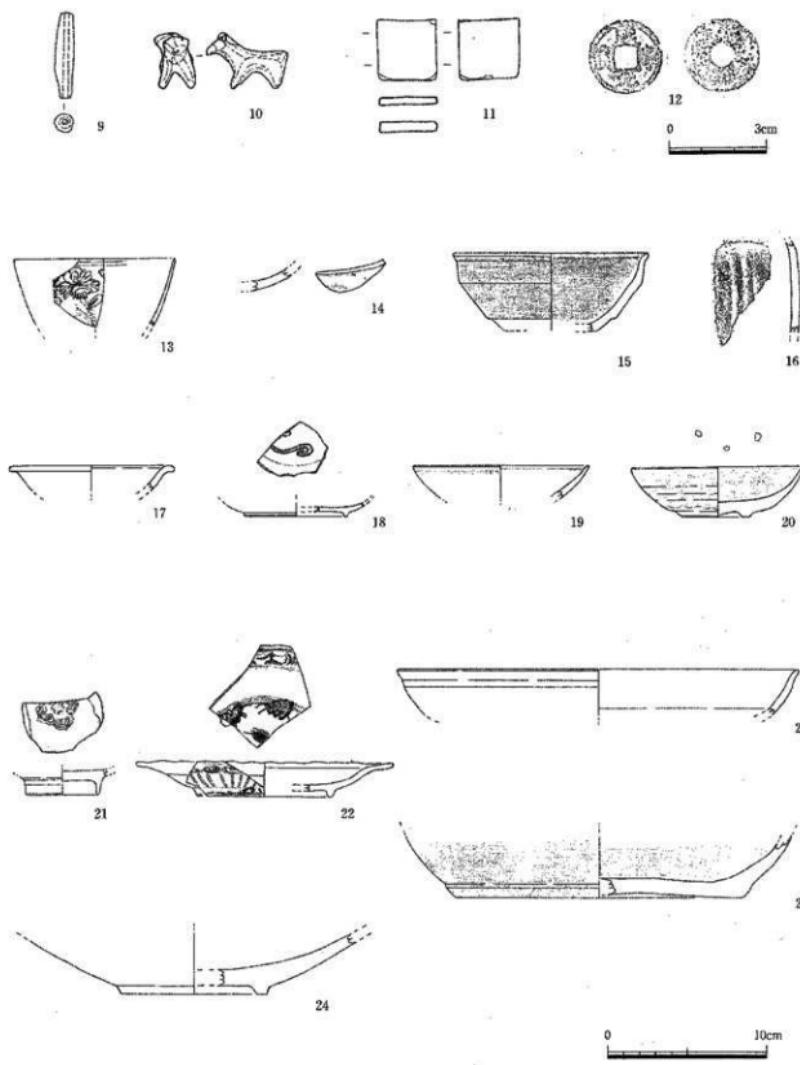


Fig. 9 第1文化層検出時出土遺物実測図2 (9~11, 13~25=1/3, 12=2/3)

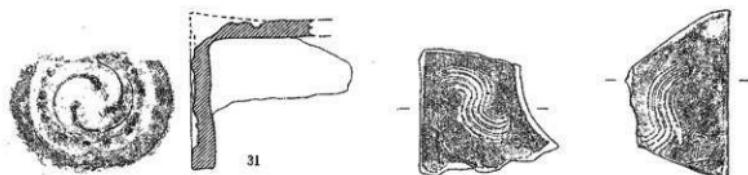
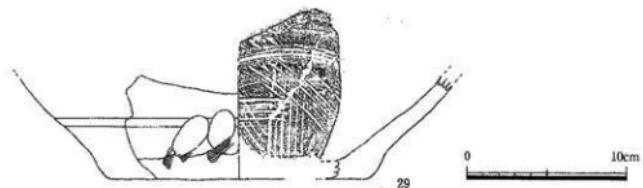
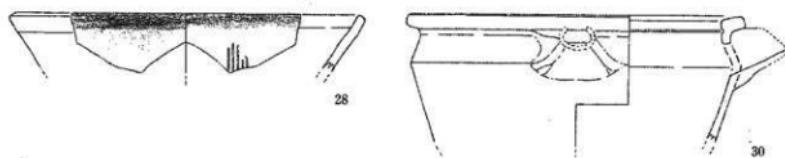
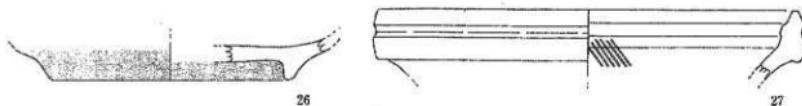


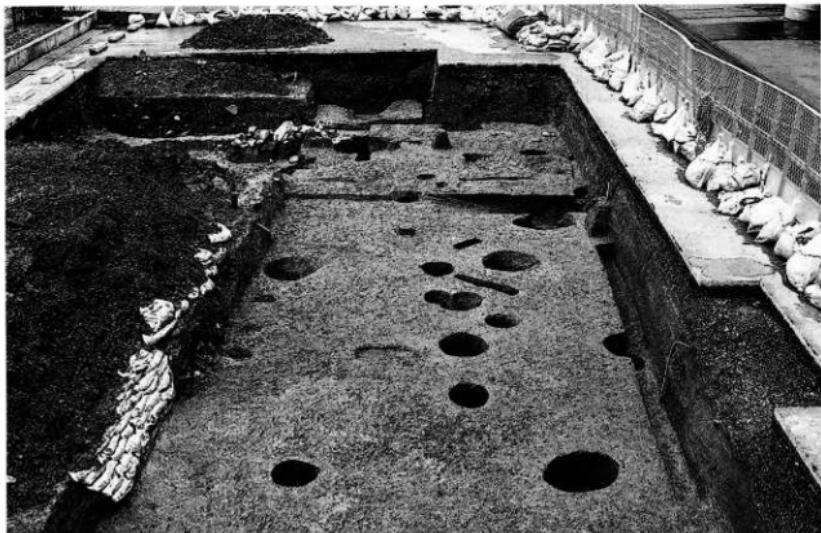
Fig.10 第1文化層検出時出土遺物実測図3 (26~30=1/3, 31~34=1/4)

## 第2節 第2文化層（8層上面）の検出遺構と遺物

### (1) 検出遺構

#### 柱穴群

調査区A～Dの1～7グリッド内で、大小5の柱穴を検出した。建物は掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。



PL. 5 第2文化層遺構検出状況

#### 焼土坑

調査区B-10グリッドで、南西-北東を長軸とする焼土坑を検出した。焼土坑は長さ69cm、幅41cm、深さ5cmを測り非常に浅い土坑である。埋土中には、炭化物を大量に含んでおり、土師器片6点が出土した。廃棄土坑であろうか。

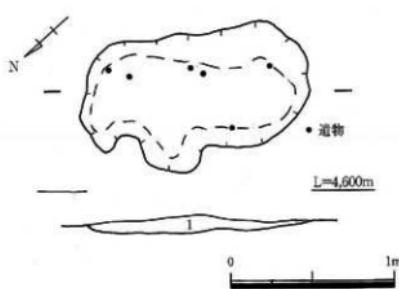


Fig.11 焼土坑実測図 (1/30)



PL. 6 焼土坑完掘状況

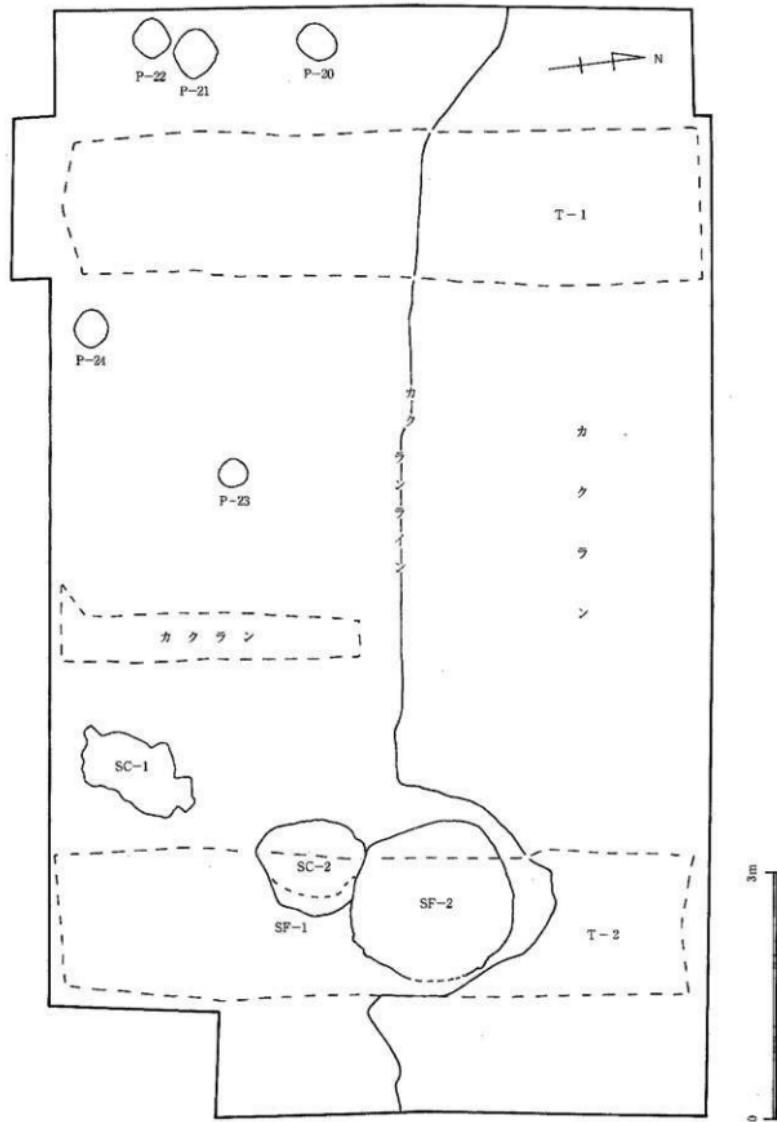


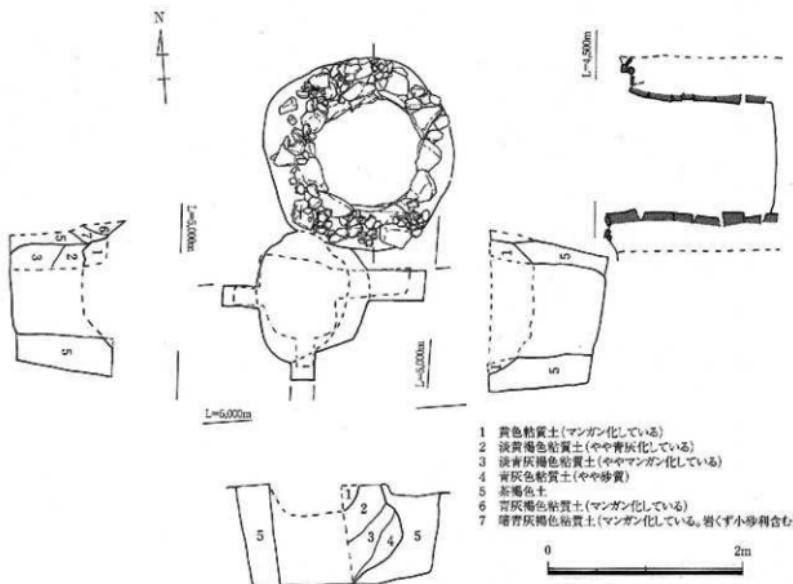
Fig.12 第2文化層遺構分布図 (1/60)

## 井戸跡 1

調査区D-11を中心検出された。井戸跡検出面で、祭祀土坑及び井戸跡2と切り合っていたが、調査者の不手際と長雨による悪事により、土層断面が崩落し詳細が些か不明な状況となってしまった。井戸跡は素堀の構造で、検出面で1.16m×0.95m、深さ1.05mのやや梢円形を呈していた。しかし、底部では四方が方形を呈する形であった。井戸跡の東壁が抉られた状況で検出されたことから、壁面崩落により井戸構築を中止したものと考えられた。調査では、抉られた部分に堆積した土砂が流れ落ち、危険な状況となつたため完掘できない状況となつた。出土遺物は検出されなかった。

## 祭祀土坑

調査区のD-11、井戸跡1と切り合う形で検出された。土坑は検出面で1.36m×0.95m、深さ44cmの梢円形を呈していた。土坑埋土中より38枚の洪武通寶が出土している。井戸跡1の状況や土坑の位置を考えると、井戸跡1構築の中止を祀った、祭祀的な意味合いを持つ遺構であると考えられる。



## 井戸跡 2

調査区のE、F-11、12を中心に検出された。確認調査の時点ですでに検出していたものである。井戸跡は、最大で内径1.15m×1.0mのやや梢円形を呈す。深さは1.75mまで掘り下げたが、長雨により地盤が緩み危険な状況であったため、底部完掘には至らなかった。井戸跡は、主に約20~40cmの花崗斑岩の角礫を用い組み上げられ、各石の間に拳大ほどの河原石を詰め込んだ構造になっていた。出土遺物は、瓦片、陶磁器片、土鍤が出土地している。

調査において旧水道局集中管理棟建設による擾乱部を検出したが、井戸跡2はあえて避けた形で掘削されており、このことを考えると昭和45年に集中管理棟が建設されるまで開口（使用）していくと考えられる。

### (2) 出土遺物

出土遺物は、7層に包含される遺物及び、各遺構より出土した遺物がある。7層内からは遺物量は少なく瓦片、陶磁器片、土師器片、鉄製品、瓦質土器片の計18点が出土している。また、柱穴からは瓦片、土師器片の計4点が、焼土坑からは6点の土師器片が出土している。井戸跡2内からは、陶磁器片、瓦片、鉄製品の計18点が出土している。

35~37は、焼土坑から出土した土師器の小皿である。器壁の内外面にススが付着したものが見られるが、灯明皿として使用されていたためか廃棄の際の焼成かは不明である。

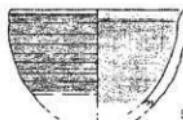
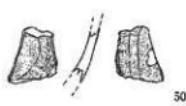
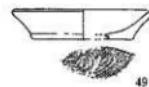
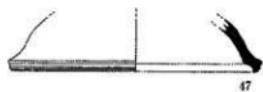
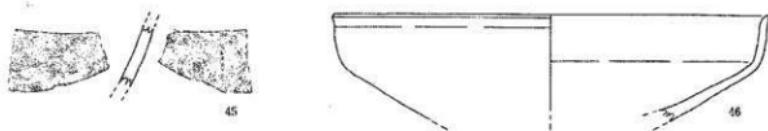
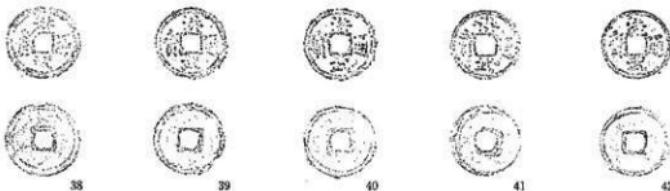
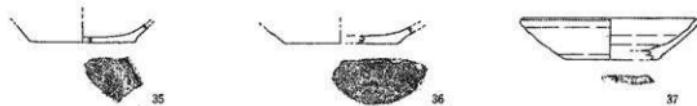
38~42は、井戸跡1を祀ったと考えられる祭祀土坑から出土した銅鏡である。全部で38枚が出土したが、銅鏡が激しい。正字で「洪武通寶」の文字が見える。洪武通寶は明錢で、初鑄年が1368年とされる。

43~46は、井戸跡2埋土内より出土した陶磁器である。43は、16~17世紀の中国景德鎮窯系の染付碗である。内面に唐草文、外面に草木文を施す。44は、15~16世紀の中国龍泉窯系の青磁の盤と見られる。花型打ちである。45は、時期は不明であるが備前の壺若しくは壺と見られる。内面にタタキ痕が残る。46は、17世紀後半の唐津の陶器皿である。内外面に灰釉が施され、買入が見られる。

47~52は、7層内に包含されていた遺物である。47は、瓦質土器の蓋とみられる。外面に浅い沈線が巡る。内外面ともナデ調整である。48、49は、土師器の小皿である。48は器高がやや高い。器壁の内外面にススが付着したものが見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。50は、14~15世紀の中国龍泉窯系の青磁碗である。画花文様を施す。51は、17~18世紀の瀬戸・美濃系の天目茶碗である。52は、瓦質土器の壺とみられる。内外面に多量のススが付着している。外面はナデ調整、内面はハケ目調整が施されている。



PL. 7 井戸跡1崩落壁面検出状況



0 3cm

0 10cm

Fig.14 第2文化層検出時出土遺物実測図 (35~37,43~52=1/3, 38~42=2/3)

### 第3節 第3文化層（9層上面）の検出遺構と遺物

#### (1) 検出遺構

##### 柱穴群

調査区B～Eの2～7、C-11グリッド内で、大小9の柱穴を検出した。建物はこれまでと同様に掘建柱建物と考えられるが、建物の復元には至らない状況であった。



PL. 8 第3文化層遺構検出状況

#### (2) 出土遺物

出土遺物は、8層に包含される遺物及び、柱穴跡より出土した遺物がある。8層内からは上層と同様に遺物量は少なく陶磁器片、土師器片、鉄製品、古錢、瓦質土器の計25点が出土している。また、柱穴からは陶磁器片、土師器片、瓦片、土錘の計10点が出土している。

53、54は柱穴29、55は柱穴30から、56、57は、8層内に包含されていた遺物である。

53は、14～15世紀の中国景德鎮窯系の青磁碗と見られる。内外面に印刻が施される。54は、陶器の大皿である。時期・産地は不明である。内外面に施釉されているが、風化か焼成不良か釉薬の状態が非常に汚い。55は、管状土錘である。全体的に灰褐色を呈す。長さ5.2cm、幅1.2cm、径1.2cm、重量は5.0gを測る。56は、白磁の皿である。時期は不明だが、中国のものと見られる。見込みに沈線が巡らされている。57は、14～15世紀の中国龍泉窯系の青磁の皿か碗である。高台無釉で、骨付きは斜めに削り出されている。見込みに線彫りの印刻が見られるが、文字か絵かは不明である。

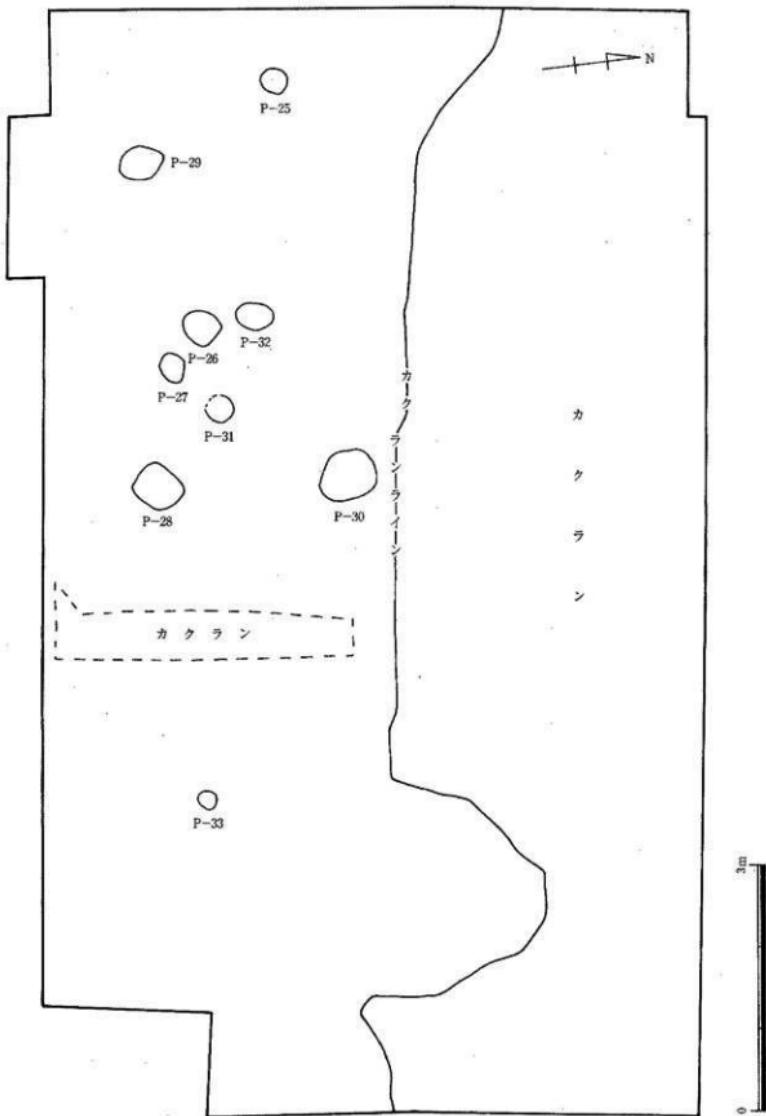


Fig.15 第3文化層遺構分布図 (1/60)

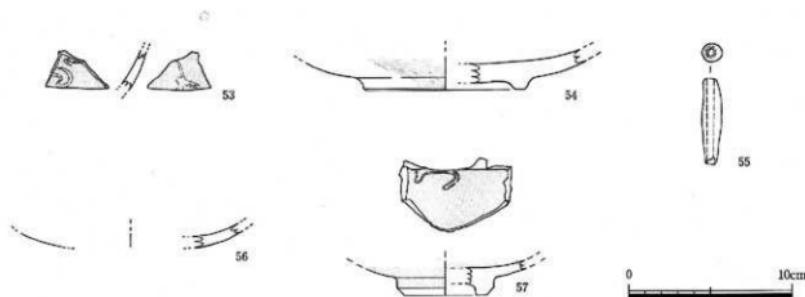


Fig.16 第3文化層検出時出土遺物実測図（1/3）

#### 第4節 9層内の出土遺物

調査の課程において、10層上面の遺構検出を実施したが遺構の存在は確認できなかった。しかし、9層内に包含された遺物が若干あるので報告する。9層内からは、陶磁器片、土師器片、瓦片、瓦質土器、鉄製品、古銭の計30点が出土している。

58は、瓦質土器の鍋かハガマとみられる。在地のものであろうか。外面にススが付着する。外面はヘラケズリとハケ目、内面はハケ目調整である。59も、瓦質土器で壺とみられる。やはり、在地のものであろうか。外面の肩部に格子状のタキ痕が残る。内面は不定方向のハケ目調整である。60は、14～15世紀の中国龍泉窯系の鉢である。高台内は蛇ノ目釉剥ぎとなっている。高台内に砂が付着する。見込みには印刻が見られるが、文様は不明である。61は、刀子と見られる。鋒が著しい。62は、改造鋸の鋼銭である。改造鋸は、加刀して修正したものではなく、新規に母錢を制作して鋤造されたものとされている。室町時代後期から安土・桃山時代に、その多くは制作されたようである。書体は元福手で、文字は不明である。破損が著しい。

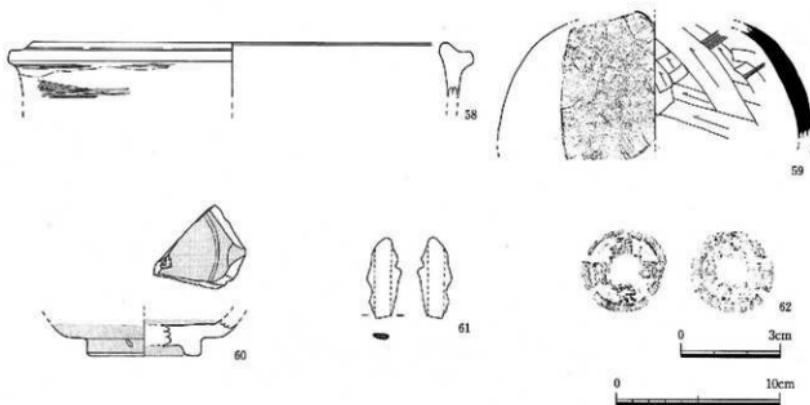


Fig.17 9層内出土遺物実測図（58～61=1/3, 62=2/3）

No	出土地点	器種	法量			胎土	色調		調整		備考
			口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)		内面	外面	内面	外面	
1	柱穴7	皿	10.7	6.0	2.1	砂粒を含む	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	底部系切り底。内外面スリガラ
2	6層内	皿		4.8		砂粒を含む	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	底部系切り底。
3	6層内	皿	6.8	4.1	1.3	砂粒を含む	淡赤茶褐色	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	底部系切り底
4	6層内	皿	15.0	11.4	2.1	砂粒を含む	淡黄茶褐色	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	底部系切り底
5	6層内	皿		7.2		わずかに砂粒を含む	淡赤茶色	淡赤褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。内外面スリガラ
6	6層内	皿	5.2	5.6	2.2	わずかに砂粒を含む	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。内外面スリガラ
7	6層内	皿	9.7	6.2	2.1	砂粒を含む	淡赤茶褐色	淡黄茶褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。内外面スリガラ
8	6層内	皿		5.8		砂粒を含む	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	底部系切り底
9	6層内	上鍤	0.3~0.4	5.3	1.2	砂粒を含む		灰褐色			重量7.5g
10	6層内	土人形(犬)	5.0	2.0	3.4	わずかに砂粒を含む		淡黃白色	ナデ	ナデ	耳、尻欠損。重量25g
35	焼土坑	皿		6.4		砂粒を含む	淡黃褐色	淡褐色	不明	ナデ	底端系切り底。外表面スリガラ
36	焼土坑	皿		6.8		砂粒を含む	淡赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。外表面スリガラ
37	焼土坑	皿	11.6	6.0	2.4	砂粒を含む	淡黃褐色	淡黃褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。外表面スリガラ
47	7層内	蓋?		15.0		砂粒を含む	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	瓦質土器。外側に沈線
48	7層内	皿	10.0	4.6	2.65	砂粒を含む	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ	ナデ	底端系切り底。内外面スリガラ
49	7層内	皿	7.6	5.0	1.6	砂粒を含む	淡黃白色	淡黃白色	ナデ	ナデ	底部系切り底
52	7層内	甕	22.8			砂粒を含む	褐色	灰褐色	ハケ目	ナデ	遺品。内部に漆に付着
55	柱穴30	土鍤	1.2	5.2	1.2	砂粒を含む		灰褐色			重量5.0g
58	9層内	貝?ハガマ?	24.0			砂粒を含む	淡灰白色	淡褐色	ハケ目	ハケ目 ヘラケズリ	瓦質土器
59	9層内	壺?				わずかに砂粒を含む	淡灰白色	灰褐色	ハケ目	ハケ目 タタキ	瓦質土器

No	出土地点	錢貨名	国名	初鑄年	書体	口径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
12	6層内	熙寧元寶	宋か日本	1068年	真書	2.3	1.5	2.5	
38	祭祀土坑	洪武通寶	明か日本	1368年	正字	2.2	2.0	3.5	38枚出土の1枚
39	祭祀土坑	洪武通寶	明か日本	1368年	正字	2.2	1.5	2.7	38枚出土の1枚
40	祭祀土坑	洪武通寶	明か日本	1368年	正字	2.2	1.5	2.7	38枚出土の1枚
41	祭祀土坑	洪武通寶	明か日本	1368年	正字	2.1	1.5	2.7	38枚出土の1枚
42	祭祀土坑	洪武通寶	明か日本	1369年	正字	2.1	1.5	2.7	38枚出土の1枚
62	9層内	方蒙治平	日本	室町後?	元福手	2.4	0.1	0.8	改造鋤

No	種別	器種	出土地点	法量				備考
				口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	重量(g)	
11	石製品	砥石	6層内	4.0	3.6	0.6	15.0	緑色岩製。欠損
61	鉄製品	刀子	9層内	4.8	1.0	0.2	12.5	錆が著しい

第6表 出土遺物観察1 (土器、銅錢、石、鐵製品)

No	種別	器種	出土地点	法量			形態及び文様	備考
				口徑・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)		
13	磁器	染付碗	6層内	10.0			染付花文様	17C、中国景德鎮窯系
14	磁器	染付碗	6層内				文様不明	時期不明、中國か長期伊万里
15	陶器	碗	6層内	11.8	5.6	4.8	天目茶碗	17~18C、瀬戸・美濃
16	磁器	瓶?	6層内				長石袖	時期不明、美濃
17	白磁	瓶?	6層内	10.2				不明
18	磁器	皿?	6層内		6.4		高台外削り、高台内蛇付着、見込み不明文様	16~17C、中国景德鎮窯系
19	磁器	染付皿	6層内	10.8				16C?、中国
20	陶器	皿	6層内	10.8	4.0	3.1	内外面施釉、貫入	時期不明、関西系
21	磁器	皿	6層内		4.5		見込み如意頭文、墨付 け跡剥ぎ	16~17C、中国景德鎮窯系
22	磁器	染付皿	6層内				外腹縁文様、墨付け跡 剥ぎ	時期不明、中国景德鎮窯系
23	陶器	皿	6層内	24.6			貫入、内面及び外面の 一部に施釉	17C後、唐津
24	陶器	皿	6層内		8.8		貫入、内面及び外面の 一部に施釉	17C後、唐津
25	陶器	鉢?	6層内		17.6		底黒に砂目有、内外面 施釉	不明
26	青磁	盤	6層内		14.8		高台内蛇の目施剥ぎ	15~16C、中国龍泉窯系
27	陶器	擂鉢	6層内	26.0				17~18C、備前?
28	陶器	擂鉢	6層内	21.8				17C後、唐津
29	陶器	擂鉢	6層内		15.8			時期不明、関西か在地
30	陶器	片口	6層内	20.7			内外面施釉	不明
43	磁器	染付碗	井戸跡2	14.0			花本文、唐草文	16~17C、中国景德鎮窯系
44	青磁	盤	井戸跡2	23.0			花茎打ち	15~16C、中国龍泉窯系
45	陶器	壺か瓶	井戸跡2				内面にタキキ痕	時期不明、備前?
46	陶器	皿	井戸跡2	22.6			内外面施釉。貫入	17C後、唐津
50	青磁	碗	7層内				團花文様	14~15C、中国龍泉窯系
51	陶器	碗	7層内	11.6			天目茶碗	17~18C、瀬戸・美濃系
53	青磁	碗	柱穴29				内外面に印刻	14~15C、中国龍泉窯系
54	陶器	大皿	柱穴29		9.4		内外面に施釉	不明
56	白磁	皿	8層内				見込みに沈線	時期不明、中国
57	青磁	皿か碗	8層内		5.0		高台形、墨分けを鋸めに取り 出す。見込みに施釉	14~15C、中国龍泉窯系
60	青磁	鉢	9層内		6.6		高台内蛇ノ目施剥ぎ。高台 内に砂目有。見込みに施剥	14~15C、中国龍泉窯系

No	種類	出土地点	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
			瓦当径(cm)	体部長(cm)	体部幅(cm)	凹(裏)面	凸(表)面			凹面	凸面	
31	軒丸瓦	6層内	13.2	11.0	12.2	粗い布目模	長軸方向にミガキ	砂粒を含む	良	暗灰褐色	暗灰褐色	左巻き巴文
32	軒丸瓦	6層内	14.2	6.5	13.2		長軸方向にミガキ	砂粒を含む	良	暗灰褐色	暗灰褐色	左巻き巴文
33	鬼瓦	6層内				ミガキ	ミガキ	砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	
34	鬼瓦	6層内				ミガキ	ミガキ	砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	[天上] 印刷

第7表 出土遺物観察表2 (陶磁器、瓦物)

## 第6章 まとめ

絵図を見ると、描かれた時代によって異なるものの、武家屋敷や會所、武寮といった建物が描かれている。今回発掘調査された延岡城内遺跡は、旧水道局集中管理棟建設により調査区の約1/2が破壊を受けている状況であった。しかしながら、井戸跡の残存や、破壊区以外での土層堆積状況は比較的良好であったことは幸いであった。

今回の調査では、上層の堆積が良好であったことや各遺構の検出面を総合して観察し、3面にわたる遺構面を設定し調査を行った。まとめとして各層に包含された遺物を中心に、今回調査・記録した3面の遺構面について若干ではあるが考察を加えたいと思う。遺構面の考察については、基本的にその上層に包含される遺物を対象として考えた。

### 第1節 第1文化層（7層上面）の検証

調査では、大きさや深さが異なる柱穴群を検出した。柱穴はすべて掘建柱のものであった。今回の調査では、調査範囲が限られたため建物の復元には至らなかった。

また調査では、調査区中央付近で台形状の高壇部を検出した。この高壇部は調査区の南側へさらに延びていくものと思われた。土層の観察でも堆積の厚薄が見られ、溝状の様相を呈していた。南側の調査が実施されていないが、建物跡という環境から考えると区割り的な役割を果たしていた可能性が考えられる。

遺構に伴う遺物であるが、柱穴内から土師器、瓦片、陶磁器が出土している。数は少ないが、唯一年代を計れる陶磁器は、18~19世紀のものが含まれていた。6層内に包含される遺物については、須恵器、土師器、陶磁器、瓦片等々様々な遺物が混在する状況であった。陶磁器については17~18世紀のものが主流を占める状況で、近・現代のものは殆ど存在しない状況であった。瓦片については、平瓦が大半で、軒丸瓦、鬼瓦が見られるが、軒半瓦が1点も出土しなかったことは疑問が残る。特筆すべき遺物としては「熙寧元宝」の出土が挙げられる。この銅錢の出土は、延岡市で初めてのものとなった。また、土製品があるが延岡市では少量ながら出土は見られていたが、今回の犬形土製品は初めてのケースであった。この土製品については17世紀中頃のものと考えられる。

### 第2節 第2文化層（8層上面）の検証

調査では、数は少ないがやや大きい柱穴群を検出した。これらの柱穴は、上層とは規模の異なる建物が存在した可能性を示すが、構造的には掘建柱のものであることが明らかとなった。しかしながら、この面で検出した柱穴でも、建物の復元には至らなかった。

またこの面は井戸跡1、2や祭祀土坑、焼土坑を検出した面にあたる。井戸跡1、2、祭祀土坑は切り合いを生じており、前章でも述べたが井戸跡1構築中に崩落したため構築を断念し、埋土後その上部に38枚を数える「洪武通寶」を供え祭祀を行い、再び井戸跡2を構築したものであることが明らかとなった。延岡城や城下には現在も数多くの井戸跡が存在しているが、今回のような例は初めてのケースで非常に貴重な資料となった。また井戸跡2は、昭和45に建設された旧水道局集中管理棟建設の際、あえてこの井戸を破壊せずに建設している様子が伺い知れることから、少なくともこの時期までは開口していたものと考えられる。

遺構に伴う遺物であるが、柱穴から遺物は検出されなかった。祭祀土坑からは38枚を数える「洪武通寶」が、縦横にされた状態で出土した。洪武通寶は、初鑄年を1368年とするが、祭祀土坑をそ

の年代と考えるには難しいであろう。祭祀土坑とほぼ同時期に構築されたと考えられる井戸跡2からは、陶磁器片、瓦片が出土している。井戸跡2は、長雨等による悪事により完掘できない状況であったが、出土した陶磁器は15~17世紀の中国景德鎮窯系をはじめ、比較的同时期の陶磁器片が多く見られた。7層内に包含される遺物については、瓦質土器、土師器、陶磁器、瓦片等々様々な遺物が混在する状況であった。陶磁器については16~17世紀の中国製のものが主流を占める状況であった。

### 第3節 第3文化層（9層上面）の検証

調査では、数は少ないがやや大きい柱穴群を検出した。これらの柱穴は、上層と規模を同じくするものであると考えられる。構造的にはも、やはり掘建柱のものであることが明らかである。しかしながら、この面で検出した柱穴でも、建物の復元には至らなかった。

遺構に伴う遺物があるが、柱穴内から陶磁器、土錐が出土している。陶磁器は、14~15世紀の中国龍泉窯系のものである。8層内に包含される遺物については、量が少ないが14~15世紀を中心とした、中国製のものが主流を占める状況であった。特筆すべき遺物としては、改造錐が挙げられる。この改造錐は、室町後期から安土桃山時代にかけて鋳造されたものとされている。延岡市で初めての出土品である。

### 第4節 終わりに

今回の調査は、調査区の約1/2が破壊され、また遺構も少ない状況にありながら非常に貴重な資料を提供してくれる遺跡であった。遺構では、井戸廃棄に伴う祭祀土坑が初めて確認された。また遺物では、犬形土製品、銅錢の「熙寧元宝」、改造錐が初めての出土となったことが挙げられる。

これまでの延岡城内の調査は12回を数えるが、各ポイントで異なる土層の堆積を見ることができ、また、その遺構面の時代をとらえる事に非常に困難な状況であった。今回の調査地は、比較的良好な土層堆積をしていたことから遺構面を3面と考え、遺物からその時代検証を試みた。おおよそ下層に進み時代は下っては行くが、遺物が混在する状況を見るとやはり「何時の時代」と確定することは困難であると、改めて痛感させられた。また、期待した江戸期の建物跡の確定についても、調査範囲の狭さや近代の破壊により詳細を掘むことはできない状況であったことは非常に残念であった。

延岡城内遺跡（第13次）は、多くの情報を提供してくれる遺跡であったが、調査担当者の力量不足や長雨による悪事により十分な調査・報告ができていない。さらに、検討を進めて行き機会を設け報告しなければならないと考える。

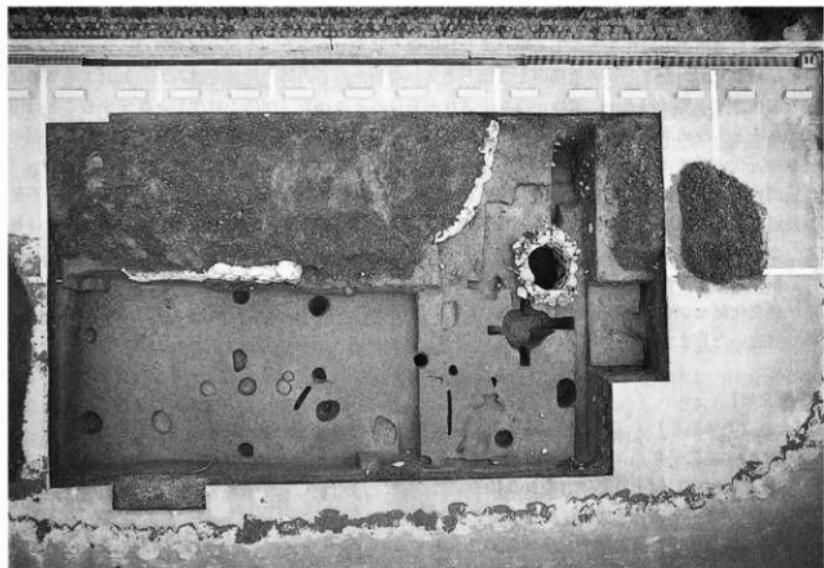
最後になりますが、今回の調査・資料整理にあたっては、宮崎県教育局文化課 松林豈樹氏、宮崎県埋蔵文化財センター 柳田晴子氏、同教育委員会 尾方農一氏に多大なご協力・ご指導を賜った。改めて感謝いたします。

### 【参考文献】

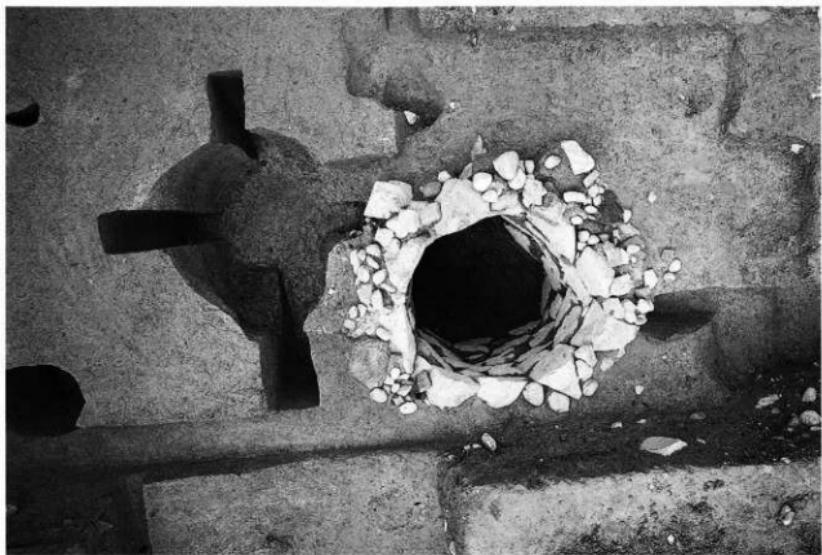
- 『太宰府条坊跡Ⅱ』・『太宰府条坊跡X V』太宰府市教育委員会1983・2000
- 『太宰府陶磁器研究』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会1995
- 『佐土原城跡Ⅰ』佐土原町教育委員会1999
- 『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会2001
- 『延岡城内遺跡Ⅰ』延岡市教育委員会2002



PL.9 調査区全景1（西より）



PL.10 調査区全景2（垂直）



PL.11 井戸跡 1, 2 全景 1 (垂直)



PL.12 井戸跡 1, 2 全景 2 (東より)



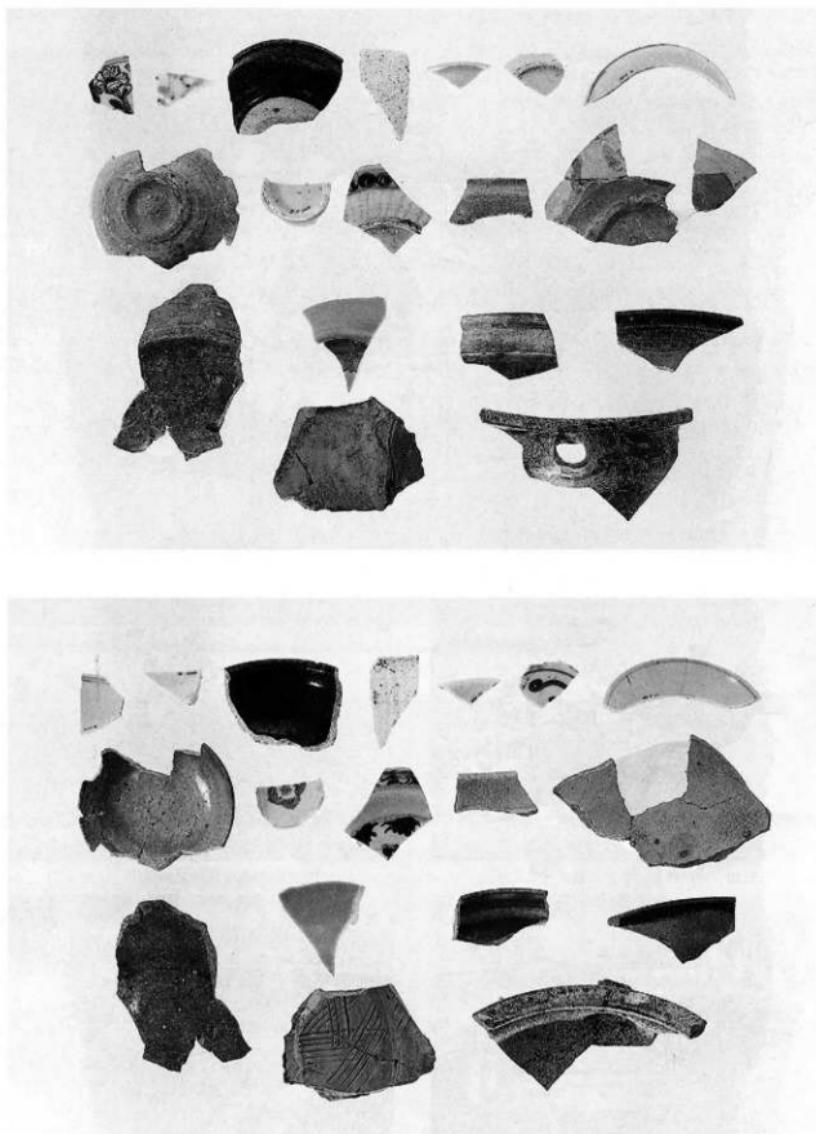
PL.13 祭祀土坑洪武通寶出土状況



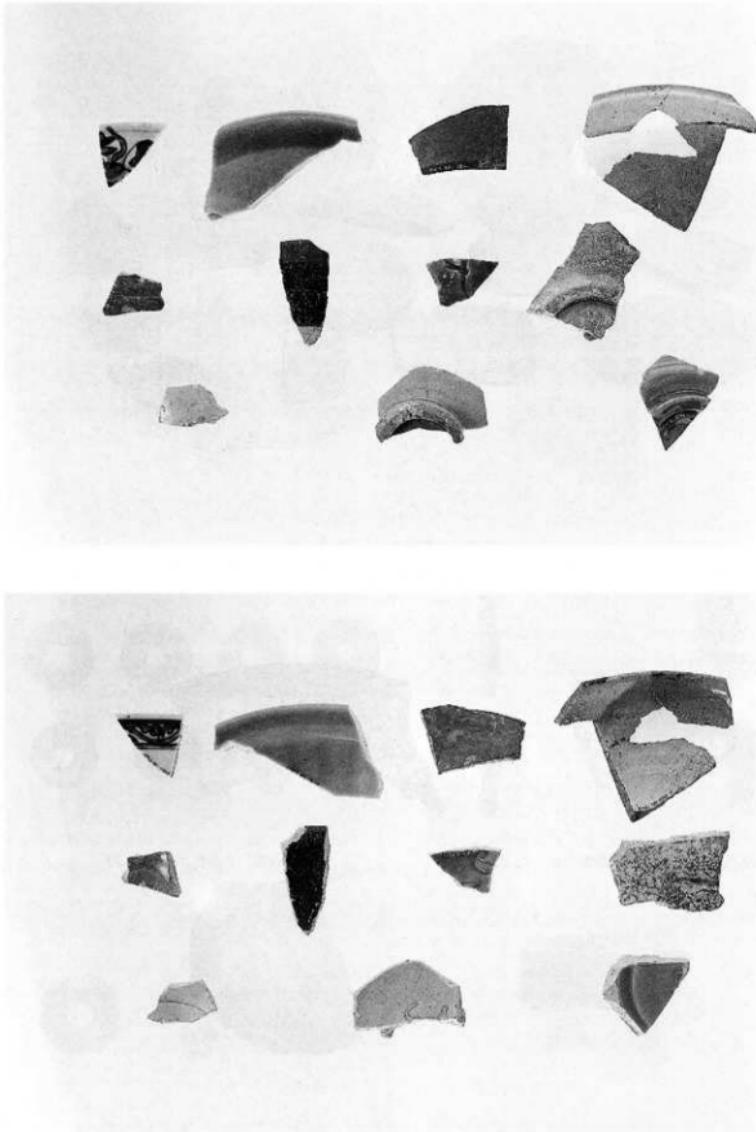
PL.14 調査風景 1



PL.15 調査風景 2



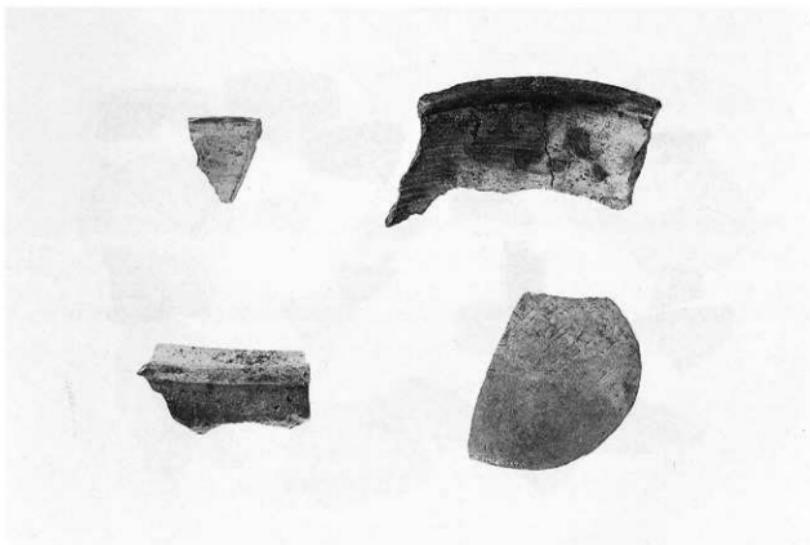
PL.16 出土遺物 1 (陶磁器)



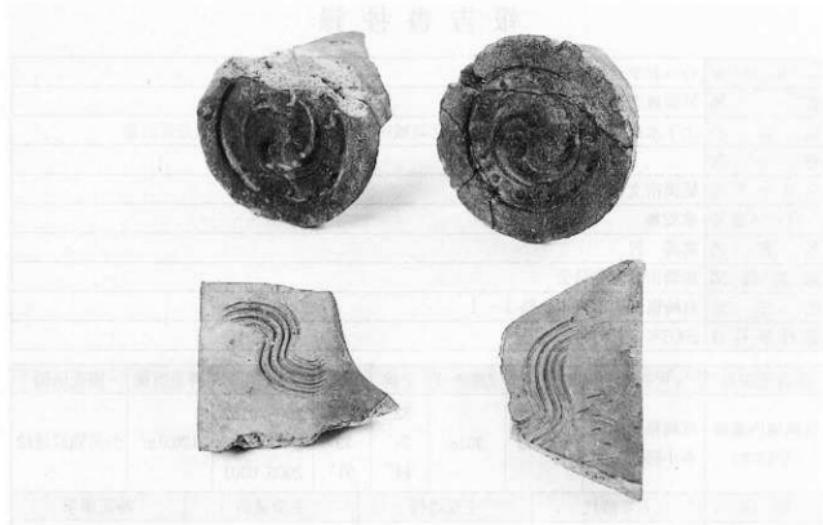
PL.17 出土遗物 2 (陶器)



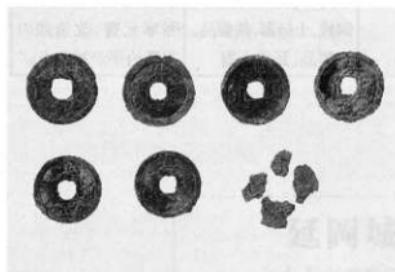
PL.18 出土遺物 3 (土師器)



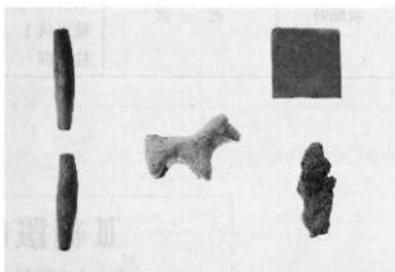
PL.19 出土遺物 4 (瓦質土器)



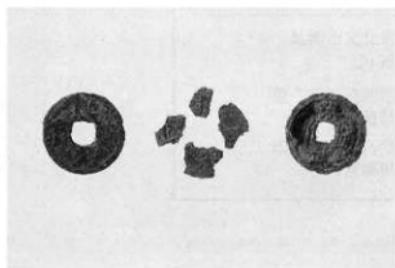
PL.20 出土遺物 5 (瓦類)



PL.21 出土遺物 6 (銅錢)



PL.22 出土遺物 7 (土・石・鐵製品)



PL.23 熙寧元寶, 方篆治平, 洪武通寶



PL.24 犬形土製品

## 報告書抄録

ふりがな	のべおかじょうないいせき
書名	延岡城内遺跡 III
副書名	上下水道課新庁舎建設にかかる延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
著者名	高浦 哲
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡 (第13次)	宮崎県延岡市 本小路77-1	452033	3018	32° 34' 44"	131° 39' 51"	2005/0107 ~ 2005/0301	120.0m <sup>2</sup>	公共施設建設
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
城館跡	近世	井戸遺構2 祭祀土坑1 焼土坑1 柱穴群			瓦類(鬼瓦・軒丸瓦・ 平瓦・丸瓦)、陶磁器、 銅錢、土師器、鐵製品、 石製品、瓦質土器		井戸を廃棄した際の 祭祀土坑を初検出。 黒寧元寶、改造錢の 方篆治平が初出土。	

## **延岡城内遺跡Ⅲ**

上下水道課新庁舎建設にかかる  
延岡城内遺跡(第13次)発掘調査報告書

---

延岡市文化財調査報告書第31集

2005年3月31日

発 行：延岡市教育委員会  
宮崎県延岡市本小路2-1

印 刷：明巧堂印刷株式会社  
宮崎県延岡市古川町82-10